

ぬ人だ。

當歸と云のは草の名である。和名「やませり」と云。挿圖の如きものである。春苗が出る。葉は圖の如く三つまたになつてゐる。七八月頃に花を開く。その色は淺紫色だ。根は黒黄色で肉が厚い。この根の形によつて、馬尾當歸、蠶頭當歸などの種類に分けられる。この根は婦人の血の道の藥になる。氣血をして各歸する所有らしむると云意味で當歸と云名が附いてると云とだ。藥品として山城の久世郡から出るものが最も質が佳く、大和の産がこれに次いでると云事だ。だから京都邊にも隨分生えてるのであらう。さてこの當歸と云名は、本來は前陳の通りの意であるが、「歸るべし」と云文字であるので、夫が不在中に、妻がこの草を庭に植ゑて、早く歸るマジナヒにすると云習慣が支那にあつて、詩に、よくこの草の事が、旅行中の夫を思ふと云ところに

描かれて居る。日本人の詩にも、これを眞似たのが随分ある。

晋の孫盛と云人の著「雜語」と云書に斯う云事が書いてある。「姜維詔諸葛亮。與母相失。復得母書。令求當歸。維曰、良田百頃不在一畝。但有遠志不在當歸也」。一寸わかりにくい文だから、この解をする。姜維は非常な才人で、初め諸葛亮に敵して居たが、亮はどうかして維を味方にしようとして苦心して、いろいろ交渉した。この出来事は交渉中の事だか、交渉が纏まつてからの事かわからぬが、兎も角亮の所へ行つた。其の頃維は母と暫く遇ふ折が無かつた。この亮の所へ行つた折、前にも來たが又この折に國のおツ母さんの手紙に接した。おツ母さん血の道が悪かつたと見えて、當歸を送つて呉れぬかと云頼みが書いてあつた。維はこの時、母の書を得た事、母の病身な事、それからこの當歸と云草の名からして、望郷の念に堪へなかつ

た。それで云つた。あゝどんな良い田を百頃も持つて居たとて、他國では仕方が無い。それよりは國の一畝の田の方がマシだ。自分は遠大の志があるので、天下を横行して居るが、そんな旅をしてるより、國に歸つた方がマシなんだ、あゝ歸りたい、と斯う云つた。

「不在」と云語は「の地位を占領することは出来ぬ」と云意で、即ち「如かず」と云語と同じである。それからこの「遠志」と云のは、遠大の志と云意と、又空間的に、郷里を遠ざかつて發展する志と云意とを含んでる。それからこの「遠志」と云名の草がある。やはり藥になる。

遠志と云草は、普通「ランジ」と呼んで居る。山谷に生ずるもので、大葉と小葉との二種あつて、大のは花が赤く、小のは花が白い。この草の根は精氣を増す藥に用ひられる。

姜維は即ち「遠志」と云草と「當歸」と云草との名によつて懷を述べたのである、當歸に「國に歸るべし」と云意を含ませたのは維が始めてだかどうかわからぬが、このことのご故事として先づ維の言が引かれて居る。維が云出したことかも知れぬ。それに「雜語」の著者は維の時代をあまり隔つて居ない。珍しく思へばこそ此事を記しておいたのであらう。

これで當歸と云草の名の感じがわかつた。しかし芭蕉はこの維の故事を引いたと云わけでは無い。芭蕉は、詩によく出て來る當歸の名の感じを使つたと云だけのことである。

呂丸は國に若い妻があつた。呂丸の不在中、支那風にすれば、當歸を植ゑて丸の歸りを待つてると云所だ。今、この塚に來て見れば、そこに莖が咲いてる。心細く咲いてる。芭蕉は當歸の花も紫、莖も紫と云ところからも聯

想のあはれを覺えた。

あゝこの塚の董よ。可哀想なことをしたなア、呂丸は。當歸の花を見るよりも、わしはこの董に悼意を動かされる、と斯う云つたのだ。

當歸は、京都邊にもよくあるとすれば、或はその塚の邊に、その頃は花は無い當歸が、實際あつたかも知れぬ。又無かつたかも知れぬ。それはどちらでも宜い。若し實際あつたとすれば、この句の出来る時の芭蕉の心に厭味は無く、若し無かつたとすれば、多少厭味に思はれる。ペダンチックな感が起るからだ。しかしそれは今日我々が當歸と云ものに親しくないから起す厭味感かも知れぬ。

大して面白い句では無い。當歸なんてものが董と並んだ爲に、側々人を動かす悼句の趣が失はれて居る。そして私解を書くのに非常に手数をかけさ

せた句だ。(とろこんでるいんろがやまいか)

古畑や薺摘み行く男ども

芭蕉句選には「古畑に」とある。どちらでも宜い。私はむしろ「古畑に」の方が不つゝかになつて内容にふさはしい心持がするが、諸書を見渡すに、「や」の方が本當らしい。

七くさの薺を、男たちが、田の中を摘みつゝ歩いて行く、と云寫生なんだ。詰らない句だと多くの人は云であらうが、私は面白いと思ふ。「古畑」と云語は、芭蕉の造語であらうと思ふ。もう耕されもしないで、雑草が仄々生えて居ようと云場所が思はれる。そして「男ども」も面白い。無骨な光景、寒い光景を芭蕉が嬉しがつたのである。

いろ／＼の名も紛らはし春の草

春の草にいろ／＼な名の草がある。どれがどれだか紛らはしいと云のである。黄菊白菊其の外の名は無くもがな」は反抗的である。この句にはさう云反抗的な所は無く、唯「紛らはし」と云つたゞけである。「だけ」と云のは決して侮りの意では無い。

木曾の情雪や生えぬく春の草

「木曾の情」は、木曾に對して我が感じたる情趣よ、と云意である。木曾では、今頃春草が成育力で雪を貫いて生えつゝあるであらうと、其地に在らずして思ひ遣つた句である。普通其地にての句として居るが、それでは「や」と云疑問が死んで了ふ。

欠

欠

躑躅生けて其のかけに干鱈裂く女

江州の旅行の際、一寸した旅籠屋の店に、晝支度する爲に腰かけて休んで居た時、そのスケッチをしたのである。一寸した粗末な瓶に躑躅がほうり込んだと云つた風に生けてある。其の下所にしやがんで、女が干鱈を裂いて居る。

「生けて」と云のは、あの躑躅もあの女が生けたのだと見なしたのである。

躑躅と干鱈と女との調和が好いなどと、いりもせぬことに、句をバラ／＼にして、又それを元のやうに組合せて喜ぶ、と云やうな、翫賞をする勿れ。目前のものを其儘寫したのだ。面白い、新しい句である。

芭蕉が疲れた足を二本並べて、煙草を一服やりながら、額はちと汗ばんでゐる、あゝ菜は鱈か、と思ひつゝ、支度の出来るのを待つてゐる。

草臥て宿借る頃や藤の花

吉野行脚の時の句である。夕方や、近く、もう草臥て、宿を取らうと、然るべき家を探し歩いている。藤の、あの沈んだ、朦朧趣味の花が、ものうげに垂れて居る。と斯う云のだ。

ものうい、疲れ足を引摺つて行く芭蕉の心持と、藤の花の態度と、一つに融合して居る。これも、配合などとは云ひたくない。疲勞と云事は、誰でも経験があらう。その経験した心持を思ひ出して、そして藤の花をながめて見れば、この時の芭蕉の心持がわかるのだ。

これは叙景で無く、主観の句だ。「藤の花」そのものも、自己の氣持の展がりに見た句だ。藤と云と、直ぐ藤棚を思ふのは、都會の人の常だ。この藤は、それ自らで、垣の上あたりに垂れてるか、或は高く、松などにかままつ

て紫を動かして居る藤なのだ。

山吹や宇治の焙爐の匂ふ時

これは書讀であると云。どんな畫の讀であるかそれはわからぬが、山吹の書では無からうか。茶の名所の宇治で、丁度今茶を焙爐にかけてる時なので、そのかうばしい香が高い。山吹が咲いている。と斯う云のである。茶の炙られる香と山吹と同時に官能を刺戟する。いゝ心持、氣高い、清い心持である。茶を製する時には、焙爐にかけて熱する事を度々する。蒸籠で蒸して攪き交せて、それからこれを簾にひろげて冷まし、さうして焙爐にかけ、揉んだり散らしたりして乾燥させる。これを露取りと云。湿りを除くの謂である。それから一旦冷まして又焙爐にかける。粘り氣が出る頃にそれを搓り揉む。

これが二番揉みである。さうして更に三度、火力の弱い焙爐にかける。この焙爐にかける毎に、高い香が放散されるのである。

西河

〇 ほろくくと山吹散るか瀧の音

これは西河（ニシカハ又はニシガウとは云はず、ニジカウと云）の瀧でよんだ句である。「たき」（古くは「たぎ」と云語は、高い所から水の落下するをのみ云のでは無い。河瀬の水の疾く奔流するものをも云語である。即ち奔瀧をも指すのである。實は奔瀧を指すのが「たき」の本義で、それから瀑布のこともこの語で呼ぶやうになつたのである。瀑布を呼ぶには別に垂水と云語があつた。だから奔瀧で今も何々の瀧と呼ばれてる所が方々にあるのだ。こ

の西河の瀧も奔瀧である。従つてこの句の瀧も奔瀧である。瀑布と思ふと、大に句の味ひが違つて了ふ。

西河の瀧、又大瀧とも呼ぶ。大和吉野郡大字大瀧と大字西河の間の奔瀧である。この瀧は吉野川の上流なのである。遠くから見ると何でも無いが、近く寄つて見ると、巖間に漲り、瀬枕立つて、滔々と流れる様、實に壯絶である。

眼前に景を見ながら、「散るか」の「か」はをかしい。斯う一寸思はれる。もつとも「哉」と云意の「か」もある。この句の「か」は、「哉」の「か」とすると、まことに明白である。しかしこの句はさうでは無い。即ち、言々にあまり注意を拂はない人等がこの句を読んで直ぐ感ずる通りに、この岸の山吹がほろくくと散るのは、この奔瀧の響の爲に散るのか、と云意で可いので

ある。

佳句である。「ほろく」と「が非常に感を鮮かにして居る。」

山吹の露菜の花のかこち顔なるや

延寶九年か、其の前年あたりの作である。奇警なことが頻りに云ひたかつた時代だ。しかし奇警なのは必ずいけぬと一概にけなすのは駄目だ。平も可し、奇も可しである。俳諧は面白きが面白しだ。この句は私は面白いと思ふ。勿論才の勝つた句ではある。

山吹が露を帯んで居る。如何にも上品、艶麗である。近くに菜の花が咲いてる。これは野趣満々たるものである。山吹は貴女である。菜の花は農婦である。此は彼を見て、己れの野姿を顧みてかこち顔で居る、と云擬人である。

望湖水惜春

行く春を近江の人と惜しみける

この句は元祿三年か四年の句で、前書の通り、近江の琵琶湖を見ながら、行春を惜しんだ作である。

句意は明かである。行く春を、近江の人と共に惜しんだ、嗚呼。と云のである。あの琵琶湖をひろく見渡しつゝ、と云ことを現はす爲に前書をつけてある。前書を借りて、始めて意を成すのである。芭蕉は、たい琵琶湖を望んで春を惜む、と云ことだけ云つては不満足だつた。湖を見ながら、近江の人間と對坐して春を惜む、と云ことが云ひたかつた。全く、湖もあり人間もあつて、そこで始めてこの句に、一種の人間と廣い背景と共に備はつて、

場所に動かぬ行春のあはれが浮んで居るのである。

しかし前書無くては、一向無意味になる句である。芭蕉は前書を離しても、句そのものだけで解りもし面白くもある句のみを作つた人である。この句も芭蕉は、前書無しでも、人は、近江といへば湖水の背景は當然思ひ浮べて呉れるものと信じて居たのだ。しかし、それは芭蕉のちと無理と云ひたい。ちと理窟が、つて、口にするも厭であるが、この句だけを、虚心平氣に讀むに、どうしても場所の感は無くして、會談の處は何處かわからぬが、「近江の人」と惜んだ、としか取れぬ。従つて、「近江の人」と云ふものと「行春」と、どんな關係があるだらうなどと、愈理窟が、つて來る。

この句を芭蕉が作つて、大津の尙白に見せたら、尙白は、「先生どうもこれは感服しませんな、行春を近江の人と惜むと云つても丹波の人と惜むと云

つても、同じぢやありませんか」と云つた。芭蕉は不平だつた。その次に、素枝君の所謂「實の人」去來に會つて、「かう云句が出来た、尙白に見せたら斯う云つたが、お前はどう思ふ」と云つた。「實の人」は、襟を正し居住を直し（たに違ないと思ふのさ）謹んで答へた。「尙白の評はいけません。近江の人と惜み給ふは、湖水朦朧たる折ふしの住家であるからであります。暮春若し丹波においでになつても、此趣向は浮びますまい。歳暮又近江に御いでになつても、此感はありますまい。風流はおのづから其場にあるものでござからな」と斯う云つた。芭蕉は喜んだ。曰く「去來、汝は風雅を語るべきものなり」と云つた。去來は大に得意だつた。此問答は去來自らが書いてる。尙白は「近江の人」と云つて、場所をあらはすとは思はなかつたのである。去來の云やうに「近江においでになる」「丹波においでになる」と云意で、尙

白が「近江の人」「丹波の人」と云つたのでは無いのである。去來は直ちに、「近江の人」で近江と云場所を顯はしてると感じ、即ち芭蕉の思はせたい通りに思つたのである。しかし、私は芭蕉も去來も、ワタクシがあつて、尙白の評が中つてると思ふ。後には芭蕉も、この句だけでは、場所が出ないと思ひかへしたか、「猿蓑」に出てるのには、前書が附いてるのである。

前書の助けを借りて顯はれるこの句の趣は、なか／＼幽かで深くてあれである。去來が、季節の感興と場所との關係を説いた其の事だけは中つて居る。

「ける」では文法にあはぬ、「けり」だと云人があるが、感を強める時には、「ぞ」が上に無くても「ける」と云つて可いので、いくらも例もあることである。(例が無くつたつて構はないんだが)

行く春や鳥啼き魚の目は涙

これは奥の細道の大旅行の發途、千住で見送り人に別れた時の句である。奥の細道の文に、「彌生も末の七日明ぼの、空朧々として、月は在明にて光をさまれるものから、不二の峰幽に見えて、上野谷中の花の梢又いつかはと心細し。むつまじき限りは宵より集ひて船に乗りて送る。千住と云所にて船をあげれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の泪をそゞぐ」とあつて、この句がある。それから「これを矢立の初めとして云々」とある。あの大旅行の吟咏の中の第一着手の句なのである。

古文前集卷三に、陶淵明の「歸田園居」と云五言長篇の詩がある。曰く「少無適俗韻。性本愛丘山。誤落塵網中。一去三十年。羈鳥戀舊林。池

魚思^ニ故淵^ヲ。開^レ荒南野際^ヲ。云々^シ。この句の記憶で、鳥と魚の悲しむ、と云こ
とを云出したのである。しかし、鳥や魚が郷を戀ふ、と云この詩の意を取つ
たのでは無い。唯、行く春や、鳥も泣くわ、魚も目に涙を浮べて居るわ、あ
あおれは、生きて歸れるかどうかからぬ長途の旅に上るのだ、と斯う、そ
の時の激しい悲しみを云放つたのである。鳥も魚も皆泣いてる、と己が悲し
みをひろげて感じたのである。「魚」を云つたのは、川邊で出来た句だからだ。

行く春に和歌の浦にて追ひつきたり

私は面白い句だと思ふ。笈の小文の旅行の時、吉野の花を存分に見て、高
野へ出た。こゝではもう花が散る時。それから和歌の浦に出た。悠々たる春
らしき海。南の暖い海。その景を見て、芭蕉は、山から海邊に下りたと云

事からも、大いにユツタリした氣持になつた。もう春が行つてしまふと云頃
であつたが、この浦へ来て、悠々たる春を覺えて、おゝ、行く春に追付いた、
と云感じを起したのである。實にその折の芭蕉の心持がよくくわかる。こ
の句の成るには、前に山路の旅行と云事が無くてはならぬのである。そして
山を下りた海岸、しかも暖い静な、名もやさしき、和歌の浦、で無くては
ならぬのである。工夫して出来た句では無い。ホツとしてハーとした氣持で
ある。斯う私が云のを、をかしく思はず、全くホツハーだとわかつて下さる
方が、屹度讀者諸君の中にあると信ずる。

二月十七日神路山を出づるとして

裸にはまだきさらぎの嵐かな

この句も前書が無いとわからぬ句である。前書に伊勢大廟下向の折の吟だと云ことがわかるので、そして句に「裸」とあるので、増賀の事を思つて云つたのだなとわかる。

増賀は一條天皇の長保五年に八十七で寂した密宗の高僧である。この人は實に僧の真なる者であつた。屢身に蒙らせられむとした榮譽や富を一切逃避して信の人として無垢の生涯を大成した。而してくだらぬ世俗の規定習慣因襲などには捕はれずして大自在に生きて居た高人である。自分の道心が十分に緊張しないのに苛つて天台山の根本中堂に千夜詣で、毎夜千度の禮をして祈つたのはこの人であつた。論議が終ると饗を庭に投げて乞食を養ふ例式であつたが、この時突然大衆の中より飛出して乞食と一緒にその饗を食つたのはこの人であつた。後の宮から戒師に召され、據無く參ることは參つたが敢

て南殿の勾欄に醜狼の言を放つてわざと退けられたのはこの人であつた。師匠の慈悲が僧正に任せられて、宮中へ御禮に參る時、時の僧俗翼従して盛な行列を練つた、其中に、乾鮭を太刀に佩き瘦せさらばひたる女牛に跨り、「名聞こそ苦しかりけれ乞食のみぞ樂しかりける」と唄つて、師を呵し世を警めたのはこの人であつた。

この増賀が彼の根本中堂へ祈願して次に、一人伊勢の太神宮へ詣つて祈請を凝らした。すると夢のうちに「道心を發さむと思はれ此の身を身とな思ひそ」と云示現を蒙つた。夢覺めて賀の心は始めて覺めた。「さうだ名利を捨てるんだ」と云ひ様神前を走り出で、着て居た着物を悉く乞食等に投與へて、身に一絲を纏はず赤裸で下向した。途に遇ふ人は皆氣違だと思つた。誰が如何に罵つてももう増賀の心は微動だもしなかつた。さうして乞食をしながら、

慈悲大師の許へ歸つて來た。慈悲は増賀を見て云つた。「名利を捨てた心と認める。しかし何もこのやうな極端な舉動をしなくても宜いでは無いか。只威儀を正してそして心に名利を離れるが可い」と諫めた。名利を永く捨てること云事を爲遂げるには、斯う爲なくてはならないのです」と云つて、「あら〜、樂しの身や、おう〜」と云つて師の許を辭した。今の言で云へば「愉快だ愉快だ、わあい」と云つたのだ。

讀者諸君はこの話を何と聞きます。唯、昔こんな變人の坊主があつた、とのみ思つては駄目です。さうだ、全くさうだ、一切の世俗との交渉を斷たねば眞に生きることは出來ぬのだ、と雷氣の衝動を受けた如くに感ずる人にして始めて増賀のこの行の意義が解るのである、それが解つて、始めてこの句を吐いた芭蕉の心持が解るのである。たゞ故事を思ひ出して云つたと云や

うな興味のないのだ。

句の文字は極めて平々である。たゞ「まだ」と云語の使ひ方に、散文と違ふ所がある位だ。今芭蕉が下向の時、風が烈しく吹いて居た。時は二月中旬、今の三月中旬の時候だ。餘程暖くはなつて居るが、若し増賀上人のやうに、今裸で歩いたらどうだらう。とても堪へられぬ。まだ春は浅い、まだ二月だ、まだ二月の嵐が吹いて居る。裸にはまだ寒くて耐へられまい。と斯う云つたので、二月の嵐に歩みつゝ、大決心を事實に固めむが爲に赤裸で下向した増賀を彼は涙を以て思浮べたのである。

この句を作つた時の芭蕉の心持、其の時の氣候、風などをよく味つて貰ひたい。増賀が裸で下向したのは夏か冬かそれはわからぬ。それはこの句には關係無いことである。たゞ二月の嵐に、裸の増賀を思ひ出したのである。

子に飽くと申す人には花も無し

笈の小文に「見る所花にあらずと云事なし。思ふ所月に非ずと云事無し。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心月にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で鳥獸を離れて造化にしたがひ造化に歸れとなり」とある。この文の「月」とか「花」とか云のは、象徴的な語で、平安朝の「ものゝあはれ」と云語と同じ界の語である。

「花」と云つても「月」と云つても意は全く同じなのである。この句に所謂「花」もそれと同じ意である。

子供にはもう飽きました。はじめは可愛いとも思ひましたが、もう全くイヤになりました。それに私のやうに五人も出来ましては全くはや弱ります。風流も何もあつたもんぢやありませんからな、とこんな事を云人があ

る。今もよく聞くことだ。さう云のを、芭蕉が聞いて、そんなことを云人は、ものゝあはれを見る目が開いて居ないのだ。子に飽くなど、感ずる心では、自然や人間の眞、美を感ずることは出来ぬのだ、と斯う云つたのである。

一葉集には、この句の前書に「示門人」とある。成程さうで有らう。下のものに喩すと云口吻のある句だ。誰か門人のうちに、子に飽くと云ことを云つた者があるか、或は家族俗料の繁を厭ふと云やうなことを云つたものがあるか、どちらにしても、さう云やうなことを云人に對し、又云はぬ他の門人にも警める爲に、この句を示したのである。

或書に「類柑子には此句の前書として、桐火桶に抑貫之が萬葉集には是こそまこと有る歌といへるに、日くれたり今歸りなむ子泣くらむその子の母もわれを待つらむ、と云のが出て居る」と註して居る。これは、句選年考に、

「類柑子に見えたり其詞書に云桐火桶に云々」とあるのを見て、誤つたのである。類柑子には、

桐火桶に抑貫之が萬葉の哥にはこれらそまことある哥といへるに

日くれたり今かへりなん子なくらんその子のはもわれをまつらむ

子に飽くと申す人には花もなし 翁

迷ひ子や一膳ひえてさくら花 序令

折とても花の間のせがれかな 晋子

など、また人の句や其角自身のや、皆、子に關した句を並べてある。桐火桶に云々と云ところは、本文の高さに書いてあつて、決して芭蕉の句の前書では無い。其角が、子に關した歌や句をこゝに並べた、其の最初にこれを置いたまでのことである。又この類柑子の「桐火桶云々」は桐火桶の原書と

同じである（群書類従に出てる桐火桶には「哥とていへるに」とあり、類柑子には「哥といへるに」とある。こんな「と」字の有無はどうでもよいことであり、又群書類従の校訂者自らこの桐火桶まだ完全な本とは認められぬと云ことを云つてる）が、句選年考には間違へて引いてゐる。それを或書はやはり年考の間違の儘に引いてる。苟くも自分等が尊崇する人の作品を研究し紹介すると云際には、もう少し忠實でありたいと思ふ。感受性の不足の爲、知識の不足の爲に誤を傳へると云ことは、これは賞めた話では無いが、恕すべきではある。俳書をウンと持つてる人にして、一寸類柑子を探すと云事を億劫がつて、たい机の上に今在る年考だけでドシ／＼片附けて、所謂裁決流るゝ如しを遣る類の人は、許すべからざる俳壇の罪人である。一體文藝を味ふと云ことを、大勢寄つて遣ると云事は、可くないことである。獨りでジツ

と念を凝らして、作者の心と自分の心と契合する界に入つて、徐ろに味ふべきである。そして知識上解らぬ事が起つた場合、或適當の人の所へ、それぞれ聞きに行けば宜いのである。もつともこの註釋者の不眞摯若しくは暗愚と云事は、昔から今に至るまで連綿として不目出度く續いてる事である。源氏物語の註釋を書いた萩原廣道の外に、古來註釋書いた者に祿な奴は無かつたやうである。暗愚は笑つてやるべし。不眞摯に至つては責めねばならぬ。

序に云。桐火桶に出した歌は、山上憶良の罷宴の歌で、憶良等は今は罷らむ子哭くらむ其の彼の母も吾を待つらむぞを、誤り傳へたのである。そのかの母も」と云ところは「其もその母も」と訓む説もあり、「その子の母も」と訓む説もある。

高き屋にのぼりて見ればの御製のありがたきを今もなほ

叡慮にてにぎはふ民や庭竈

高き屋にのぼりて見ればと云歌は仁徳天皇の御製だと云傳へて來たが、それは誤であると云事は、もう今は誰でも知つてゐると思ふが、或は知らぬ人もあるかと思つて一寸云。之は斯う云わけ。新古今集卷七、賀歌の一等初めにみつぎ物ゆるされて國とめるを御覽じて

仁徳天皇御歌

高き屋に登りて見れば煙立つ民のかまどは賑ひにけり
實に馬鹿々々しい話で、歌の調子といひ表白法といひ其の當時の風では全く似もつかぬ。しかしかうと信じて新古今の編輯者は記入したのである。古い歌も自由に味はれる今日から見ると馬鹿々々しく思はれるのである。

「日本紀竟宴歌」と題した一集がある。竟宴と云のは編輯事業や講書が終つた時の宴會のことである。この集は、延喜六年十月廿二日の日本紀講義すみの竟宴に皆が日本紀中の人物を題にして歌を詠んだのを、集めたものである。其の中に

得大鷦鷯天皇

左大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣時平

多賀度能兒乃保利天美禮波安女能之多與母爾計布理豆伊萬蘇波美奴留と云のがある。この歌が天皇の心持になつて云つてるのからか、いつか大鷦鷯天皇其人の歌と誤り傳へ、その歌も又時代流になほされて、新古今に誤り載せられたのである。もとは一般に仁徳の御製と信せられて居た。芭蕉もさう思つて居た。

欠

欠

つたので、此頃斯うして引籠つてると段々交渉と云事の分量が少くなつて、實に好い心持だ、あの嵯康が、手紙の返事を出すのがうるさいと云つたが、其のうるさくから免れることが出来た、と云つたのである。

解釋に枝がさいたが、芭蕉がこの句を吐いたのは四十三四歳の頃である。老慵の感が起るべき年頃だ。この句は、己が老慵其事を叙せずして、己が氣分で感じた蠲賣を叙した所が、題に不即不離（こゝには適當な語では無いが）で妙趣がある。

この句は、私は氣分がよく顯はれた句として大に重んずる。

白魚に價あるこそ恨みなれ

白魚、こんなに清らかな白魚は、金銭で賣買するのは、汚すやうな氣がす

る、これでイクラなんと云のは勿體ない氣がする。甚だ遺憾である。浮世なればこそちや。と云つたのである。何だか私はこの句は、云ひ方が露骨なやうな、氣取つたやうな氣がして、あまり好かぬ。

鶴の巢も見らるゝ花の葉越かな

この句は、前にあつた「花の雲鐘は上野か淺草か」を詠じたと同じ場所即ち深川の草庵での吟であるらしい。續虛栗に、並べて出してあるからだ。葉越と云のは、木の葉の隙から、向うの物の見えることを、こちらから云語である。和歌の浦を松の葉越に見るとか、葉越の月などと云。「花の葉越」と云のは無理な云ひ方である。芭蕉は「葉越」と云のを「木の隙を通して見えること」と云風に使つたのであるが、葉の無いのに「葉越」と云のはどう

も無理だ。「花の葉越」と云つて、花のすき間から見えることを云つた積りなんだ。

鶴はともすると寺の屋根などに巢をくふことがある。それを花のすきから仰ぎ認められた時の興を云つたのである。

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

「阿蘭陀」は云までも無く「阿蘭陀人」と云ことである。阿蘭陀人も日本の花に引き寄せられて馬に鞍おいて騎つて來た。と云のである。葡西兩國人和蘭は古い日本の友邦で、慶長二年來頻繁に來て商業をした。葡西兩國人の如く、蘭人も宗教を強ひないので家康も信用して貿易發狀を交附した。それから蘭人は毎年三月一日に登城して將軍に敬意を拂ふ例が出來た。東都歳

事記の「三月朔日」の所に「阿蘭陀人參府の年登城せしが近來は日定期なく道すがら見物多し」とあり。又「二月二十五日頃」と云所に「紅毛人五年に一度參府。かびたん一人筆者一人都合二人なり當月の末到着し本石町三丁目長崎屋源右衛門が方に泊し二月上旬登城す古來は毎年來りしが近來五年に一度となる又かびたん筆者の外に外科一人來りしが是も文政以來改りて二人になれり」とある。芭蕉の頃は毎年一度三月一日に登城した時代であつたらう。

頼政の歌に「花咲かば告げむといひし山里の使は來たり馬に鞍おけ」と云のがあつて人口に膾炙して居る。鞍馬の謠ひにも使はれてる。この「馬に鞍」をこの句にも使つたのである。

草履の尻折りて歸らむ山櫻

或書には「雨降りければ」と云前書がある。この前書は必ずしも必要でない。句のみに顯はれた意味は、花見に山を跋涉した。疲れた。いざ歸らう。このペタ／＼する草履を折りかへして足輕になつて歸らう。と云のである。前書を附ければ、雨が降り出したから愈足輕に急いで歸らう、と云ことになるのだ。しかし句中に雨は無い。芭蕉がこの句に雨を聞かせようとは思はなかつたらう。

草履の尻を折る事に就ては因幡の俳人岡田機外氏が秋聲會に寄せた説が最も中つて居る。曰く「長道をするに草履の尻が長く伸出る。斯うなると歩き難いばかりで無く、ハネがあがり砂や埃があがるから、草履の尻を上の方へ折り返し足で押へて歩く事がある。これは地方の人のよく遣る事で、婦人な

どは格別に此方を用ひて居る。

落ちざまに水こぼしけり花椿

花椿は椿の花である。「落ちざま」は落ちる時である。椿に雨が溜つて居た。それが花が落ちる時にこぼれた。と斯う云寫生だ。昨夜雨が降つて今朝霽れたと云やうな時であつたらう。

何でも無いことさ。當り前のことさ。しかしこの句に寫された一刹那の風趣は云べからざる興があるでは無いか。これが面白くないと云人は、俳の眼がまだ開けないのだ。自然を見る眼が開けないのだ。

芭蕉句選講話 春之巻終

瓊音著述目録

俳諧音調論	明治卅三年八月	新聲社
俳句評釋 <small>(俳諧講演集ノ内)</small>	明治卅八年三月	金港堂
蕉風	明治卅八年五月	金港堂
さへづり	明治卅八年九月	南江堂
新俳諧奇調集	明治卅九年三月	鷗聲堂
古俳諧講話	明治卅九年十一月	東亞堂
俳論史	明治四十年四月	文祿堂
俳句研究	明治四十年五月	東亞堂
東海旅行圖會 <small>(田山花袋、小栗風葉、道線、未醒ト共著)</small>	明治四十年七月	修文館
俳句の作法	明治四十年十月	修文館
さくら貝	明治四十年十二月	修文館

目録

俳句階梯	明治四十一年五月	東亞堂
短俳句一萬	明治四十一年十一月	修文館
俳古選新選(訂校)	明治四十二年一月	東亞堂
小理小情	明治四十二年一月	東京國民書院
三紀行	明治四十三年三月	文成社
短評俳句選	明治四十三年五月	文成社
默想の天地	明治四十三年八月	東亞堂
桐壺、帚木、(新釋源氏物語)	明治四十四年六月	新潮社
空蟬の釋(一之卷ノ内)	明治四十四年九月	文成社
芭蕉句選年考(大野酒竹)	明治四十五年七月	博文館
俳話しる椿	明治四十五年七月	俳味社
教員諸氏の爲に	明治四十五年七月	修文館
註俳句選(長尾素枝)	大正元年十月	

大正二年五月十二日印刷
大正二年五月十五日發行

芭蕉句選講話(春の巻)

正價金拾錢



著作者 沼波武夫

發行者 伊東芳次郎
東京市神田區鍛冶町八番地

印刷者 高橋賢治
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所

東京市神田區鍛冶町八番地

電話本局八八四番
電管東京二七二番

東亞堂書房

堀内新泉先生著

人格と運命

大判洋装二百頁 正價八拾 送費八

(萬朝報批評)人の社會に處する要訣より如何にして人格を高むべきか如何にして運命を造るべきかを説きたるものにして著者は由來小説を以て世に聞えたる士なるが此種の文體にも自ら其丁寧なる筆力を見る(報知新聞批評)所謂世に處する新活法を平易に説きたるものにて近來盛んなる人格の修養には好適の研究材料なり。

堀内新泉先生著

運命之改造

大判洋装二百廿頁 正價八拾 送費八

(教育時論批評)我を處置するものは我也、運命は我れ自ら之を造る、何ぞ別に神あるを要せん底の見地よりして、自家運命の改造すべきを説きたるものにして、所説皆肯すべきもの甚だ妙からず、夫の徒に自家運命の非を嘆する薄志弱行の輩は、本書を讀まば必ずや大に悟る所あらんなり。

加藤咄堂先生著

補雄辯法

大判洋装二五〇頁 正價七拾 送費八

(報知新聞批評)著者は居士佛敎家中第一流の雄辯家也本書は雄辯學や因明や西洋論理學や著者の経験杯を基礎として雄辯法の説明を試みたる者文辭簡明にして中々面白し(國民新聞批評)著者は雄辯法を實際に行ひつゝある人なり(國説)其説く處も實際に出で経験より來りしもの極めて多し演説敎家は一讀すべき書なり。

弘道主筆足立栗園先生著

鍛心身養氣法

大判洋装約二百頁 正價八拾五 送費八

(報知新聞批評)養氣の一事は古來聖賢の尊ぶ所にして又事業家の大に努むる所なり蓋し之れ無くば人に何等の勇氣なげればなり(報知新聞批評)緒論に元氣精神と生命と身體との關係を説き第二編に於て養氣と攝生第三編に氣力養成法を論じ第四編に於て心身鍛練の實驗として東三古今に亘り三十三家の所説を擧げ第五編として養生訓を載せ附録に飲食と喫煙と題して泰西十大家の實驗を掲ぐ心身鍛練の法を説く至れりと云ふべし。

東京血液療院熊代彦太郎先生著

自活氣合術

大判洋装二百餘頁 正價八拾 送費八

事の成ると成らざるは一に當事者が氣合の強弱に關する。氣合充實し、元氣旺盛なる時は百弊通達し、鬼神も之を避く。若夫れ、應對、談話、折衝、交際、實業、軍事、學術、技藝、其他人事百般に應用せば、其効力の驗著なる眞に驚嘆すべきものあらむ。古來偉人英雄が人に勝つての秘事として密に活用するの士は之を速に本書を見よ。以て氣力を増大せむと欲する弘道主筆足立栗園先生著

膽力之鍊養

大判洋装約二百頁 正價八拾五 送費八

夫れ大丈夫の立つて天下に事を爲さんと欲するや、其の最も肝要なるものは豪邁不屈の大膽力に非ずして何ぞか。高才あり、遠識あり、博學あり、衆能ありと雖も、膽力なくして大事將た何事をか傲し得むや。古來偉人英雄の仰慕すべき大事業の半面は、之れを膽力の活歴史なりと稱すとも決して過言にあらざる。膽力の鍊養、豈志ある者の冷眼輕視するを得べき所ならむや。之れ何人と雖も必ず本書を一讀すべき理由也。

後藤男爵閣下序・井上泰岳先生編

現名士の活動振り

大判洋装二六〇頁 正價七拾 送費八

(萬朝報批評)桂首相、大隈伯、乃木將軍、遠澤男、犬養代議士、坪内博士など、官吏、軍人、政客、實業家、學者、文士四十五名家の日常生活を詳細に寫したる書なり(國民新聞批評)種々なる意味種々なる方面の名士の日常生活百餘項を列叙したるり何れも今日新聞或は現在に見聞する諸名士日常の事實たけに讀んで飽かぬ好讀物なり又好書也。

現名士修養百話

大判洋装二百十頁 正價八拾 送費八

修養は吾人が終生の一大事、何の時に至るも之れを廢すべからず。今安部磯雄、尾崎行雄、斯波貞吉、大町桂月、鹽井雨村、東海林蕉雨、徳富蘇峯、佐治實然、建部肇吾、本多靜六、木村鷹太郎、村上專精、山路愛山、黒岩周六、加藤咄堂、三宅雪嶺等の諸名家が修養處世の金科玉條を叩きてその實驗上の成功秘訣を紹介す。品性修養人格鍛練の無上訓誡なり。

加藤咄堂先生著

讀書法

大判美本二九〇頁 正價九拾五 送費八

(やまと新聞批評)讀書に關する一切の要件を詳説し附するに長篇の社會教育論を以てせり況んか先人の所説を透徹し加ふる一切の要訣を説いて親切詳密を極むるに、讀書恩恵の爲に最も忠實なる著述と謂ふべき也(東京朝日新聞批評)讀者に簡明なる解決を與ふるに妙を得たる咄堂が自家多年の経験をも得ざるべし。一讀果然學ぶべき多し、讀むべき多し迷津に彷徨せる今の世の青年讀書子に、最も愉快にして最も痛切なる解決を與へたり。

東京血液療院熊代彦太郎先生著

鍛心身深呼吸健康法

大判洋装約二百頁 正價八拾五 送費八

活潑の精神は、健康の身體に宿る！ 天下深呼吸の如く、簡易にして、廉價にして、而かも(1)身體の諸機能を強健ならしめ(2)元氣を充實し(3)記憶を旺盛にし(4)思想を統一し(5)精力を集中し(6)膽氣を擴大する等の偉効ある、健康増進の妙法他にありや。且夫れ本書の價値多き所以は、所謂机上の空論に非ずして、言々著者が多年の實驗に準據せし點に在り矣。

心身健康會長檜山鐵心先生著

頭腦記憶力増進法

大判洋装百三十頁 正價四拾五 送費六

ジョンソン博士曰く「記憶力は人間の根本的能力である此能力なくんば到底有らゆる智力の運用を期待すること出来ぬ」と、實に學問をする上にも、事業を営む上にも、記憶力程吾人の世に活くるの上にも必要なる能力はないのだ。本書は檜山會長が其多年の實驗と富饒なる學殖とによりて、本書力増進の最新秘訣を懇叙せる一大活書で、從來此種の著述中曾て其類を見ざる痛切の卓説である。學生、實業家、軍人等問はず、是非速に參考あれ。

木村醫學士校閱・漆山又四郎先生著

腦力養成法

大判洋装百六十頁 正價五拾 送費六

文明の競争は智力の競争也優勝劣敗の分るゝ所に腦力の強弱如何に存す腦力の養成豈忽緒に附すべけんや本書は即腦神經衰弱其他諸種の腦症の治療法より腦力及び記憶力増進の原理方法を詳叙せる者如何なる階級の人士を問はず必ず腦力の勢を奮む可らず。

加藤咄堂先生著

禪學觀

本書は加藤咄堂大居士が、哲學、宗教、心理、倫理、文學、衛生、武道、處世等の各方面より、前後縱横に禪の真相を觀察し、禪の妙用、練磨、養心の工夫、坐禪の形式及方法、禪と道徳、禪と文學藝術、禪と劍道、坐禪と衛生、禪と人格修養等に巨り、大膽にして警拔なる科學的解剖を試み、古來幽玄難解の禪の真相を剔抉して、見性悟道の一大事を解決すること、吹毛劍を揮つて枯葉を斷つが如き感あらしむ、與奪縦横、活殺自在の大勇猛心を鍛錬せんと欲するの士は乞ふ活眼を開て此活書を讀め。

加藤咄堂先生著

文字禪

(九州日々新聞批評) 本書は禪に關する小品を蒐集したるものにして講話あり、漫録あり、抜抄あり、感想ありて初學者に禪味を解せしめんとする者たり著者加藤咄堂氏は演說に文章に名を當世に馳せたる人にして文に精采あり奇氣あり又た縱横透徹して讀すべき處此書の妙味なるべし。

黑岩周六先生序・加藤咄堂先生著

冥想論 附坐禪論

(萬朝報批評) 本書内篇十三章、哲學、宗教、倫理、生理、詩美等諸種の方面に亘りて、品性修養の根柢たる冥想の必要を敘し、其理論と方法を詳説し、和漢古今先覺の思想の提供を來りて引證發揮、また餘蘊あるなし、外篇二章禪學小景、冥想雜感外に坐禪論等共に修養を心掛くる者には缺くべからざるの指針なり(大阪毎日新聞批評) 冥想論の一篇字々と近來快心の著なりと云ふべし。

淨庵禪師細鈔・森大狂居士嚴訂

禪師老子講話

本書は老子の教訓を禪門近世の大德淨庵禪師が卓抜の見以て平易簡明に講解せられたる珍書にして、禪の妙と老子の玄と相進發して龍の雲を得たるが如く、當に乾坤を吞吐するの感あり、人事紛々俗務糾集の中に没頭するの土一び本書を繙かば、神韻縹緲として心胸自ら快潤なるを得今附するに禪師が柳生但馬守に與へて禪劍二道の極意を詳示したる秘書「太阿記」を以てす俱に精神鍛錬の絶好鎖也。

遠藤文學博士序・祥雲文學士校訂

新形四百七十頁 正價五十五錢 送費六錢

獲生論 語辨

古來論語の講解を試むるもの汗牛充棟も尙ならずと雖ども而かも尙學者を以て亡羊の嘆を發せしむるは、豈に昭代の痛恨事にあらずや、本書は徂徠先生の遺著にして當に如上の缺陷を補ひ得て餘りあるの一大珍書、書中訓讀と講義との二項を設けて釋義正鵠、語句平明、溫言宛も父母の赤子を導くが如きの中に、而かも森嚴犯すべからざる聖人の偉大なる人格を彷彿せしむるの概あり、眞に初學道に入るの好指南也。

濹江保先生纂譯

ソクラテス論語

(東京朝日新聞批評) 人間社會の實踐躬行に適切なるソクラテスの語を孝悌、修身、齊家、公務等の二十八章に分類排次せる書にて希臘古代の聖人が人に教ふる所の如何なるものなるかを知り且つ味ひ且つ行はむに非ざる排次法を便利なりとすべし聖人は東洋のみの産物に非ず苟くも人間は存する所には人間の道存して之を教ふるの聖人ある也文の簡古にして含蓄深きも殆んど孔子の論語に同じ。

袖珍美裝三九〇頁 正價七十五錢 送費六錢

大内青樹居士序・淨庵禪師著

禪と修養

(萬朝報批評) 禪の唯止唯消極なりと爲す世の誤解を破し其靜動兩面を詳説し物質精神兩方面より束縛を脱する法を教へ宇宙の本體は即ち我にある事を示し延びたる人生の目的、精神力の養成處世の秘訣等に論及す禪の何物たるかを知らざる者も然讀玩味するうちに自ら無自性の姿を認むるを得む(讀賣新聞批評) 枯木禪野狐禪の難病を救濟する爲に本書を公にしたたりと言ふ著者の識見は極めて明快に書き下された宗演禪師頌詞・破魔禪居士著

禪と活動

(萬朝報批評) 大に靜中の動換言はれば禪の積極的活動的方面を意欲せんと努めたるもの、如しされば先づ卷頭より「大勇猛心」聖諦第一義「靜中動」一課體になれ「言ふは易く行ふは難し」常軌を逸する勿れ、等の數章に亘りて詳細に活動的禪の如何なる者なるかを述べ以下九章に亘りて詳細に活動的禪の如何なる活動如何なる人によりて活動せしむるを歴述せり文章又一般宗教書類と全く其類を異に明快横詞藻豐富にして再讀するに足る。

文學士沼波瓊音先生校閱・宮垣四海先生著

俳味禪味

俳味とは如何に？ 禪味とは如何に？ 蓋禪味を解するの士にして亦初めて俳味を談すべし。本書は俳禪色蕉によるて建設せられたる俳味論の骨髄を明にして、閑寂趣味の福音を宣傳し極端なる物質主義に茶毒せられたる現時代の人心に一大覺醒を與へて以て虚飾を去り簡易に就たる現枯淡の生活をして趣味を生ぜしむ近時思想界の革新命也。

文學博士幸田露伴先生著

潮まぢ草

(太陽批評) 一讀するに此書程著者各の性格を表したるは稀なるべし吾人は本書が單に文學的産物として價値多きを語ると共に青年に發する教訓書として乾燥無味の修身書よりも遙に效多きを揚言して憚らざるなり(中央公論批評) 殊に土偶木偶は著者の詩情の決して老いざるを見るべく其五回のさされ文の如きは絶世の妙文金色夜叉の宮の書簡の如きは到底比べものにならぬ心地す。

加藤咄堂先生著

修養はなし草

「兩意開話の奇警なる「文談武談」の壯烈なる「夜雨蕭々」は一讀悚然たる幽靈奇聞を語りて、附するに著者が得意の幽霊論を以てし「茶榻禪話」は浩蕩飄逸なる超俗的逸話を述べて字々清風を生ずるの思ひあり、若し其れ「修身教材」に到つては、則ち修養自警の絶好資料！ 俱に文章演說坐談等の新題材として興趣洋々眞に晴行雨居の好伴侶。

加藤咄堂先生著

朝思暮想錄

(朝思の一節) 儼なる哉、今の青年、生活の爲めに業を求むることを知つて、道の爲めに求むべきを知らず。酒々利に走りて、唯目前の事を企畫して其の根本を逸すること、(暮想の一節) 人生に於ける事業もとより少からず。されど唯だ赫々の功を社會に立つるのみを以て大業と見ると、勿れ、沈思冥想、我が本來の心性を徹見し、其品性を培ひ其人格を養ふ亦實に大なる事業たるなり……

中判美本三百頁 正價八十七錢 送費八錢

加藤鳴堂先生著

世態人情論

大判美本六百頁
正價二圓三十錢
送費十圓二十錢

本書的確なる統計と、奇警なる觀察を以て、多趣有益なる史上の事實と、興味深き文藝上の作品を以て、痛烈なる如き快筆を以て、人心の機微、世相の表裏等を、正面より、側面より、最も大膽に、最も精細に、現社會の忌憚なき解剖を試みたるもの、時に親を減して、斬馬劍を揮ひ、時評として、世の妙論を語る。眞に是れ壓搾せられたる風俗地理とも目すべき、平易に示されたる社會學とも稱すべし、生活難に悩めるの士、就職の方針に惑へるの青年等には、必ず本書を一讀せよ。

「弘道」主筆 足立栗園先生著

古英の生活觀

中判美本約百廿頁
正價三圓十錢
送費四圓十錢

北海タイムス批評) 幾多の史書を採りて古武士が平生其身を率ゐし日常生活の狀態一斑を觀察し、特に勤儉に關する成せし武將英雄平生の大覺悟を尋究して、梗概を編次せしものなりといふ。

堀田文學士 共著

圓滿生活論

中判洋裝二六〇頁
正價七圓十錢
送費八圓十錢

(東京日々新聞批評) 圓滿生活は人生の理想なり、近來文明の向上と共に社會は益々複雑となり、人間の欲望は愈々停止する、圓滿主義を去る、一日の生活は愈々矛盾、破綻、衝突、多くなる、決して徒勞ならざるべきなり。

福澤桃介君著

富の成功附株式成功策

大判洋裝壹七〇頁
正價五圓十錢
送費六圓十錢

(報知新聞批評) 在來の成功致富を説く者に異り、著者一流の露骨なる成功秘訣を語る所興味甚大なり、殊に其經濟的用意ある猪突主義は最も味ふ可き一家言にして附錄株式成功談亦諷諭す可し、近來の快著也。

金々先生著

致富儲けばなし

大判洋裝壹四〇頁
正價四圓五錢
送費六圓五錢

(報知新聞批評) どりや談義を初めやうと面白可笑しく説出す當流金儲傳授、是を讀んで金儲の出來ない人は福の神にもどりケンにも見放された人なる可し。

松波法學博士序・原田定造先生著

手形取引の顧問

大判美本壹九〇頁
正價八圓十錢
送費八圓十錢

本書は近來手形の取引が益々煩雜を加ふるに隨ひ往々複雑な法律上の手續きを誤つて意外の奇禍を被る者多きを憂ひ、手形法に精通せる原田先生が爲手形、約束手形、小切手、國際手形等の性質、形式、受授の手續きを詳細に説明して、且つ附するに「法律用語の解釋」を以てせられたるもので、松波博士が實に「問答體に依りて手形に關する法規の一般を平易に説明し、讀者をして直ちに其知らんとする所を得せしむるは本書の特色なり」と賞せられたる實業家必讀の良書である。

文學士勝屋錦村先生譯

社會主義が實行されたなら

大判洋裝二一〇頁
正價六圓十錢
送費六圓十錢

(大阪毎日新聞批評) 本書は社會主義者の理想とする世界は一箇の夢想郷に過ぎずとなし之を實現し得たりとせんか社會に斯の如き惡結果を生ず可しとの懸念を勞動者の家庭を背景にして面白く書綴れる、獨逸の代議士リヒタルの著を譯せたる痛快なる讀物なりといふべし。

堀内新泉先生著

時間活用法

大判洋裝二三〇頁
正價六圓十錢
送費八圓十錢

(報知新聞批評) 人生の如何に時間の價値大なるかより時間を使用するの心得をば數十百項に別して丁寧深切に記述したり、時の貴ぶべきことを浪費すべからざることを如何に之を言ふ處なれども之を知りて行ふ者少く、遂に暇因頓切風常盤を吹くに及んで悔恨するもの多き時に於て斯の切實なる書の出るは喜ばし。日本新聞批評) 金を浪費せざぬ人は最も時間を浪費せぬ人は殆ど無く、紀律の價値なき日本人は最も意を致すに致すを要す、是れ本書の必要なる所以。

藤田日東先生著

近最獨學法

中判美本二三〇頁
正價四圓十錢
送費六圓十錢

現時の學校教育は智能啓發に對する一般方略を授くるに過ぎず、適者生存の活社會に立て劣敗者たり老朽者たりを免れむと欲する者誰れか常に獨學に依りて活ける智識の淵を掘り、努めざるべけんや、本書は即ち此獨學自修の新捷徑を詳説するに餘蘊なきもの、學生諸君は勿論何人と雖も必ず讀せざるべからず。

加藤鳴堂先生序・本多五陵先生著

健康朝起の勧め

中判美本壹五〇頁
正價三圓五錢
送費四圓五錢

(中央公論批評) 生理的に精神的に朝の冷氣に打たれて麗かなる太陽の光を呼吸することは大なる益のあるものである、本書は其効用を並べ更に古來之れによつて成功の基礎を築いた人並びにその遺訓を收めたものなり。

大場健兒先生著

どもり矯正の實驗

中判美本全一冊
正價二圓五錢
送費四圓五錢

(時事新報批評) 著者自身が多年吃音者として苦みし結果種種の研究を爲し自己の吃音を全癒したる經驗によりて吃音に對する感想及び最も簡單なる實驗上の吃音矯正法を叙したるもの、吃音者の參考とすべきなり。

安田操一先生著

禁煙の實驗

大判洋裝壹六〇頁
正價四圓八錢
送費六圓八錢

(東京日々新聞批評) 著者が實験を以て其の効果を試みし告白なり、經濟上及び衛生上より討究して其の効驗と害とを明らかに證明したるものなり。(萬朝報批評) 酒は止められるが煙草は止められぬとはよく人の言ふとなり、この書は具體的にその方法を説き禁煙の爲し得らるることにして且つ如何なる効果あるかを説きり。

(密嚴訂校)

和漢先哲遺著 諸大家校訂

車上叢書

袖珍トツプギルト總クロース 各冊三百頁内外頗美裝 正價一冊 金六十錢

第一卷 ○ 西郷南洲言志錄講話(全) 西郷南洲翁手抄 白田石楠先生講述

第二卷 ○ 野村新泉先生遺著 足立栗園先生譯註 野村新泉先生遺著 足立栗園先生譯註

第三卷 ○ 大田錦城先生遺著 東亞堂編輯局校註 大田錦城先生遺著 東亞堂編輯局校註

第四卷 ○ 野村新泉先生遺著 足立栗園先生譯註 野村新泉先生遺著 足立栗園先生譯註

第五卷 ○ 貝原益軒先生遺著 足立栗園先生校註 貝原益軒先生遺著 足立栗園先生校註

第六卷 ○ 貝原益軒先生遺著 足立栗園先生校註 貝原益軒先生遺著 足立栗園先生校註

西郷南洲翁の座右銘たる言志錄を取りて逐條詳細なる講解を加へ翁が進退行藏の迹に照して一十則を附せる稀世の名著也。

幸田文學博士本書に序して曰く「人須らく活動なすべし沈静を知らざるとは静の如き言動の根たらずや。人須らく沈静を愛すべし」と。

修身齊家の箴誨、作詩習文の妙訣より博く歴史を談じ世態人情の表裏を穿ちて文辭簡淨、意味深長他はよく云ふ能はざる所に言及せり。

本書は前篇と同じく、能く儒佛老莊の精神を吞養自警の箴として作夜の群星を望むが如く、稀に見るの命言妙句集たり。

井上文學博士が其著書中に「格言の服膺すべき語録中の白眉と稱するもの決して溢美にあらずるなり」と激賞せられたる名著也。

前記貝原益軒先生の名著「慎思録」の後半を収め本篇を以て全部完結となす懇切詳細なる訓譯と註釋とを附すること前篇と異らず。

破魔禪居士著

偉人修養史

大判洋裝二一〇頁 正價六拾錢

剛毅なる所を學ばんと欲せば、先づ英雄の爲せる事跡を觀し且つ其の事業を歎味して、必ず身以て其事に處し心の地を得べし」とは近代の巨匠、西郷南洲翁の箴言にあらずや。本書は即ち古來偉人英傑が以て偉人たり英傑たるに到りたる修養自強の方法を研究し其宗旨すべき言行を録し固ならしめ剛毅不撓の大勇猛心を養成せしむる一大活書也。 德富蘇峯先生序。鹽見戈山先生著

逸話 偉人之風化

中判美本二七〇頁 正價五拾錢 送費六拾錢

夫れ水の流れを示すものは、其水面に浮べる葉の一片なりとすれば、偉人人物が赤謀なる人格の眞價を語るものは、即ち其無用意の間に於て發せられたる片言隻行に非ずして何ぞや。本書は古今東西に亘りて、偉人先哲が諸種の趣味深き奇聞逸話を集めたるものにして、德富蘇峯先生は「筆端自在快陣を斬るの概あり」と贊せられたり。巨人達人が絶大なる感化を被らむと欲するの士は、乞來て此書を三讀せよ。

小立志 全力の人

大判洋裝四七〇頁 合本壹圓四拾錢 送費十錢

獅子の兎を搏つや其全力を用ふと、自己の全力を擧げて事に當るの一人に非ずんば、到底活社會の成功を語るに足らず。年あれば、頓悟徹底せし白髮翁あり、可憐の美少女あり、貞愛の賢母あり、暴戾の惡漢あり、無心の兒童あり、波瀾百出悲壯淋漓、一讀血湧き肉動く近時脂粉の香に飽ける有爲の子女は本書に接して人生絶大の光明を求めよ。

熊田草城先生著

(賜天覽)少年武士道

全二冊各二百廿頁 第一第二各四拾錢 送費各六拾錢

報知新聞批評 本書は少年の志氣を鼓舞し忠勇義烈の精神を煥發せんと欲するものなれば少年の好伴侶として家庭に須の讀物たるべし(大阪毎日新聞批評)本書は我國の史乘に現はれたる英雄豪傑四十名を選り其少年時代の勇武壯烈なる行為を叙せるもの(福岡日々新聞批評)古來十六歳以下少年の武藝を美的に書いたもの總て三十五人各人の下傳と訓戒とを附し又上欄に註解を添へて少年讀者の便に供して居る氣のきいた讀物である。

楓村居士著

小英雄 俠雄錄

大判洋裝二二〇頁 正價六拾錢 送費八拾錢

(馬關毎日新聞批評)之れ著者が曾て支那に遊び長江を遊り親しく彼の政治宗教經濟人情地理を探究し其結果林林總總あり一俠雄を假來りて巧に小説に仕組たるもの海賊あり酷吏あり佳人有り或は綠雲洞の活劇となり或は不平黨の集會あり洋產の最後雪夜の情話となり幾多の波瀾ありて讀んで壯快を覺ゆ尋常小説の比にあらず。 陸軍歩兵中尉安川隆治君著

(賜天覽)血 烟

大判三九〇頁 正價壹圓 送費八拾錢

(やまと新聞批評)著者は素と一年志願兵として軍隊生活に入り日露の戦役に會して軍に從ひ旅順の攻圍に奉天の會戦に殊勳を樹てたるも四度び敵彈の傷つくる所となり和成るに及び歸來身を財界に投じたるの人妻靡せる人心を提醒し忠君愛國の志氣を鼓舞せんとして本書を成す收むる所戦争か天誅かより平和克復に至る廿一節肉彈飛び血煙漲り壯絶絶能を極む。

福本日南先生著

英雄論

（東京日々新聞批評）本書は古今東西の英雄を拉し來りて種々の批判を加へ其風手本特能態度性癖を紙表に活躍せしめ千載の後尚之に親接するの感あり著者の文最も此種の記述に適し單に文章を學ぶ者の爲めにも一本を具へざるべからざるもの殊に情氣一世を歡ひイカラ風の人心を柔化せんとする時此快著の出づるは我讀書界の爲めにも社會化爲めにも大に賀せざるを得ず

白柳秀湖先生著

親分子分

（東京日々新聞批評）世間の事業はすべて親分子分の關係にて維持せらるるものなり、古來より日本の大親分頼朝、源氏、秀吉、家康の四人につき其天下を取りし根本の理由を説明し其經濟上に於ける親分子分の關係を述べたり其着眼の普通史家に一頭地を抜けるものありキビキビしたる書きぶりには讀者をして一氣に讀了せしむるに足る面白き著述なり

山路愛山先生著

武家時代史論

我國史を讀みて最も波瀾起伏に富めるは武家時代也最も多き教訓を讀むるも亦武家時代にあらざるや、愛山先生今其燃屏の史眼を放ちて筆を承久の役に出し中古の戰術を論じ、鎌倉より室町へ過渡時代の形勢及戰術民俗を論じ、武士を論じ、外國交際の形勢より諸侯の富國策、京都及江戸の發達、徳川時代の民政を説きて、更に天草騒動の顛末を詳叙し、我帝國史の華あり實ある、中古より近世の史實に就きて縱横の論評を加へらる趣味津津たる一大痛快史論也

小杉天外先生著・阪井紅兒先生書

伊豆乃頼朝

頼朝が生涯中最も趣味深く涙に富めるは、伊豆に蟻伏せし間の前半生に在り、蟻が小島の雨の晨、伊豆山権現の月の夕、兒が瀧に祐親の無情を憶りつ、逆ける子の魂を得たるも幾度か運命の數奇なるに驚きはれたるは、頼朝の先生其胸懐の彩筆を揮つて此間の幾微を穿ち、兼て天外武士の眞骨頭を活躍せしむ。硬軟自在の筆致、近來稀に見る頼朝傳也

福本日南先生著

黒田如水

（國民新聞批評）戦國英雄中の異彩小東照公如水一生の行動を其心事までに立ち入り縦横自在に解剖し來る如水は著者同郷の偉人之を描くに史的材料の豊富なる例の奔躍飛ぶが如き快筆を以てす油の乗りし好史傳たるや論無し

福本日南先生著

直江山城守

（萬朝報批評）石田三成と相約して天下を一匡し、家康を介して太閤の舊業を承せんとし、人事を盡し、敗後、敵を他へ頼つて晩年の風月を嘯きたる直江兼隆の一生は飽くまで勇ましく清く高し、日南これを日本男兒の典型として天下に紹介す、行文烈々、字々火を噴く、讀者をして兼隆たらしめずんば止まざるの勢あり、痛快の著なる哉

文學博士幸田露伴先生著・阪井紅兒君書

頼朝

大頭公の生涯は眞に努力奮闘の連続なりき、數奇なる運命の手は、幼にして斬らるべかりし英雄を伊豆に送りて更に失戀喪兒の苦がき、慘雨を降し、將に枯れなむとせし野心の萌芽を培ひて、疾風迅雷を降し、將に覇業創建の大活躍を演ぜしむ、此古英雄が埋没せる個人的事蹟に與味を有せらるる、先生此古英雄が埋没せる個人的事蹟に與味を有せらるる、久しく博愛宏證遂に斯一篇を成す、文詞渾麗、理趣精透、近時文壇、史壇の一偉觀たり

綠園先生著「新太閤記」

豊臣秀吉

▲日吉丸の巻 壹 圓 ▲筑前守の巻 近 ▲藤吉郎の巻 後編壹圓參拾錢 送費各册八錢 刊

（報知新聞批評）古今豊太閤に關するの書汗牛充棟も當ならず去れど本書の如き興味饒かなる筆致を以て其一代を叙したるもの少し、其の眞實太閤記の如きも尙本書出で、顔色を失はんとす江湖の歡迎期を待つ可し

文學士幸田成友先生著

大鹽平八郎

（萬朝報批評）奇傑大鹽中齋を傳する未だ斯くの如く詳悉なるものある無し、著者久しく大阪に在りあらゆる舊記を搜り又親しく故老を問ひ史料傳説兩つながら十分蒐集し方ある口語文をもとめてこの傳を成せるなり、第一章には與力としての功績を、第二章には學者としての貢獻を、第三章には如き如き、悲壯の行動を記す、其の亂世下、決心、準備の如き、親切可憐を極めたり、中齋の傳初めて完了

故昆尼薩臺嚴師校閱・青山霞村先生著

深草の元政

（萬朝報批評）元政を傳せし書已に三四ありと雖眞に元政を知る者少く多くは唯面白さうな人たるを知るのみ、霞村は田園に成長して元政の爲人を最もよく理解するのみ、十年前より想を構へてこの詳傳を爲す、上人の眉目初めて明らかなり、文亦清涼頗る愛すべし、新涼の夜々徐に此奇傳を味ぶ寔に快適の事なり

文學士白河鯉洋先生著

孔子

世界三聖の中、尤も吾人に深大の感化を及ぼせるものは、夫れ我が孔子に非ずや、著者眞に清國に在り許多の前人未觀の新資料を得て、茲に本書を成せるもの、之を仰げば彌高き夫子が靈偉なる大人格は、著者が流麗の史筆に依り、如として紙上に生動し、一讀儒夫をして奮起せしむ、眞に聖訓の最詳なる解説也

山路愛山先生著

勝海舟

(大阪毎日新聞批評) 幕末の偉人海舟勝麟太郎先生の生涯を記せる書なり海舟先生幕末に生れ、頑冥なる幕臣の間に困難に處し維新回天の大業を興發せし事蹟を愛山一流の筆にて縦横に叙説せり狂と呼ばれ、轟と呼ばれし海舟の一生は一面に於て幕末の活歴史なり本傳能く其間の消息を傳ふ。

大判洋裝二六〇頁
正價九十五錢
送費八錢

山路愛山先生著

佐久間象山

(中央新聞批評) 象山は維新の志士にして三尺の童幼も知るの偉傑、愛山氏は史家にして文章を以て著る、此著者にして此偉傑を傳す蓋し近來の快著と謂ふべし、叙するところは「少年時代」第一回遊學時代、「在郡中時勢の變化」、「再度の遊學」、「歸郷」、「第三回の出府」在國費居中の象山、「非命に斃る」の八章に分ち、的確なる考證と明快なる史眼とを以て極て詳細に詳傳せり、殊に口語文を以て綴りたるるところ低級の讀者にも適すべし。

大判洋裝二八〇頁
正價九十五錢
送費八錢

和前天華先生著

坂本龍馬

(東京日々新聞批評) 坂本龍馬は幕末の日本が産出したる第一流の偉人にして維新大業の中軸たる薩長連合は一に彼と大西郷との默契によりて成ると稱せらる不幸中途にして暗殺の厄に遭ひ其亦史料散佚して多く傳はらず、本書は土佐の士に聞き寺田屋に聞き、維新史料を搜り、殊に手から龍馬を殺害したる今村信郎氏に聞き之を小説體の讀物に綴りたるものにて發賣以來江湖の大歡迎を受け第五版を出せり。

大判洋裝四百頁
正價一圓十錢
送費十二錢

長谷場文部大臣閣下序文及長歌
福本日南先生序・伊藤痴遊先生著

(賜天覽) 西郷南洲

◎三冊合本特製美本——正價三圓五十錢送費十六錢

(萬朝報批評) 痴遊が其辨舌の如く筆を驅りて南洲を見るが如く描き出だしたるもの、講談速記に非ず、島津家騒動より征長事件まで廿一章に分てり、これを讀めば肩張らずしてしかも感化を受くること多し、福本日南の序と英國にて發見されし珍品たる南洲の寫眞と巻頭を飾り(雄辯批評)大西郷傳を中心として日本歴史中最興味多き幕末史の側面を寫したるもの、傳の詳密を極めたる事、對話の巧妙なる事、宛然其人を其場に目睹するが如きは著者が多年演壇より得たる、縦横活殺の手腕によりて描かれたり、而して叙事文の巧妙なる事は更に驚くべし、鹿兒島櫻島、京都岩倉、江戸城等の記事殊に可なり朗々吟誦すべし、南洲の外編中の人物何れも活躍するが中にも勝安房、山内容堂、岩倉具親、等最もよく描かれたり、續編に於ける江戸城明渡の一節は、眞に敵も味方も一齊に手を拍つて讚嘆すべき所也、近時出版の英雄傳中最特色あるもの也、夏日綠蔭の下之れを播かば暑を忘るべき也、好著也、快著也。

大判美裝全三冊
正價三圓五十錢
送費各冊八錢

林選信大臣閣下題字・加藤咄堂先生序
伊藤痴遊先生著

陸奥宗光

(萬朝報批評) 伊達小二郎の昔より「かみそり大臣」の當時に至る一代の奇行偉勳を叙す、艶姿、嬌舌、其間を點綴し、怪男子の面目は怪男子の筆によつて頗る活躍せり。

大判洋裝各一冊
正價各九十五錢
送費各八錢

藤田長江先生編

福澤翁言行錄

本書は我が新文明の一大恩人として最も光彩ある生涯を有せし平民的大偉人福澤翁の敬慕すべき言行を録してその獨立自尊主義、實學主義、常識哲學を鼓吹せしもの人格修養の活模範たり。

大判洋裝全一冊
正價三十五錢
送費四錢

伊藤痴遊先生著

第一快傑傳

(日本及日本人批評) 頭山滿、桂小五郎、星亨、中江兆民、中井樗牛其他の豪傑奇人の逸話奇聞を小説體に書き綴りたるもの、津々たる興味、眼前其の人を躍如たらしむ。消閑の好書たるのみならず、青年子弟の修養にも資するに足らぬ。

箱入美裝各一冊
正價各一圓十錢
送費各八錢

伊藤痴遊先生著
後の西郷南洲

(やまと新聞批評) 著者更に滿腔の熱心を費して此の編を成す。談は益々佳境に入りて、筆飛び墨舞ふの趣あり、谷將軍の持久の力に富める、桐野篠原の猛烈當る可からざる、村田別府の智略縱横なる、其間にありて巍然として雄大な南洲翁の面目心事、殊に歴々として紙上に躍動し、波瀾萬丈、悲壯淋漓たるものあり、且つ最も複雑紛糾なる記録と傳説となを考覈取捨して、力めて公平なる見地に立て官薩兩軍の事情を明かにしたる、著者の用意と其勢も亦實に多とせざる可からず。

大判洋裝三九〇頁
正價一圓廿錢
送費八錢

伊藤痴遊先生著
西郷南洲外篇

南洲翁と相擁し、一首の和歌に勤王の赤誠を止めて、薩摩の瀬戸に身を沈めたる傑僧月照を中心とし、南洲翁の苦衷、維新活劇の一大裏面等を著者獨特の快筆を以て直寫せり。一讀神懸ひ、鬼哭するの思ひあり。南洲翁の大人格に服せるの士は、又其別頭同志たる月照を知るとを怠る勿れ。

中判美本三七〇頁
正價六十七錢
送費八錢

白田楠先生著
西郷南洲言行錄

(毎日電報批評) 西郷隆盛は後世に懸りて一大奇蹟なり彼が偉大なる生涯の出発點は本邦歴史中の大革命なる維新の風雲にして其興味多き言行の終焉は薩摩軍人に依りて脚色されたる大悲劇即ち城山の自刃にありき、此書は此偉人の生涯を縦横に寫して割さざらんとするもの、如く材料を汎く蒐集して傳、言、行の分類に收め英雄の傳記として最も讀物たるのみならず明治維新史の一面として世人の一讀すべき良書なり。

大判洋裝二一〇頁
正價六十八錢
送費八錢

文學士物集高量先生・村田天籟先生共著
國民 日本歴史歌譚
中判美裝全一冊
正價八十五錢
送費十錢

「人毎に一つの癖はあるものよ、吾れには許せぬ、數島の道」
和歌に我が日本國民の代表的な一大趣味に非ずや。本書は
上は神武天皇、日本武尊等より、下は吉田松陰、西郷南洲等
の幕末維新の諸偉人に及び、雪の長月の夕、君を愛ひ、國事
を慨して赤誠を吐露し、懷興を寄せたる時の和歌を中心と
して列傳體に我日本歴史を叙せるものにして、吾れに我國民
性を觀ふべく屈辱の參考たるのみならず、眞に演説、講演、
修身歴史教授上の絶好資料たり。

評人 論物 朝野の五大関
大判美本四四〇頁
正價一圓五十錢
送費十錢

本書篇を分つ五。曰く官閥篇、曰く黨閥篇、曰く學閥篇、
曰く財閥篇、曰く閥閥篇、俱に是れ黨閥學人得ば人物月
且、縱横に現社會に於ける中心勢力の本源を、別抉暴露し物
快劍陣を研るの概あり。——卷末人名索引、亦眞に好簡現代
人名辭典の用を爲す。

早稲田大學講師 吉田公重先生編
米國法律學士 中判三四十頁
正價五圓十錢
送費六錢

講談諸大家講演

袖珍講談叢書

(各冊讀切)

在來坊間に行はるる講談本なるものを見るに、其内容極め共野卑粗陋な極め、當に其家の家庭に於て子女團圓の裡に誦するに堪へざり、淑女の手にするに堪へざり、吾人が遺憾とするは、かりではあるまいと思ふ。袖珍講談叢書は、如ふ上の缺陷を補はむがため、其の内容と取題とを一面に於いては讀者の史的趣味に適合せしむると共に、他面に於いては國民の徳性涵養に裨益あるものを選びし、刊行せんとするの榮を願はらんことを。

- 第一卷 小金井 堀部安兵衛
- 第二卷 貞山師 我物語
- 第三卷 錦城齋 荒木又右衛門
- 第四卷 西尾 大川友右衛門
- 第五卷 故松林 河内山宗俊
- 第六卷 寶井 宮本武藏

赤鞘の安兵衛が昔高田の場所十八番斬の奮戦、突撃より雪の曙吉良邸の討入に君に報ゆる赤穂義士の譽れを擧ぐる迄血沸き肉動く絶好讀物。

世に小金ヶ原の仇討と聞えし吉岡青山の二兄弟が、建久の昔曾我兄弟が難難苦衷に異なり、似たりや似たり、蝶千鳥の世に勇ましき仇討物語。

伊賀の上野に三十六番斬の早技を示して當時武道の鬼神と稱へられし荒木又右衛門が、門弟水海六郎次への助太刀は義を見措かざる大丈夫の俠骨が眞に花も實もある一大仇討奇談。

君の爲めに死を見ること鴻毛より軽き血連磨の重き印南數馬が、孝烈の一大美譚、忠孝双璧の好讀物は即ち是れ。

名優市川團十郎をして「嗚呼！釋の河内山」と嘆ぜしめたる名人伯圓師が得意中の得意の讀物、保六花選は即ち是れ！お數寄屋坊主の河内山、夫れ辨兒か、任侠か、無頼漢か、本書之を寫して趣味湧くが如し。

弱冠にして二刀の術を發明し、臥薪嘗膽父の仇を報じて、後遂に仙に昇せる宮本武藏は夫れ武士道の權化か！將た又、劍道の鬼神か、寶井馬琴師得意の武勇傳。

尾崎、清水、高島三大家序・高橋淡水先生著
列傳體 日本新英傑傳
大判箱入美製本
正價二圓二十錢
送費十錢

全篇を維新史三憲政史、交史、教育史、軍事史、實業史、附録の七部に分ち、徳川慶喜、勝海舟、三修實美、岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、西郷隆盛、板垣退助、大隈重信、伊藤博文、陸奥宗光、福澤諭吉、加藤弘之、近藤真琴、中村正直、新島襄、森有造、井上毅、大村益次郎、山縣有朋、川上操六、乃木希典、山本權兵衛、東郷平八郎、三井家、岩崎彌太郎、澁澤榮一、等各方面の代表的人物數十家を擧げ列傳體に其人物事業を詳述し、所謂警策、敘事明快、當に新體の大明治史として又浩瀚なる立志篇を兼ねたる物、實に空前の最近英傑傳也。

井上侯爵閣下題字・伊藤痴遊先生著
血氣時代の井上侯
大判洋裝四四〇頁
正價一圓四十錢
送費十錢

蔣公逝いて後幾年、轉た元老諸公の意氣舉らざるの感ある時、獨り我井上三侯あり。些かに人意を強からしむるの感ある蔣先生近時、老侯に親炙して、口から血氣時代の經歷譚を聞き、公の其得意の筆舌に陶鑄して乃ち本篇を得たり。袖付橋の秋の夕や如何に、別府温泉の雨の長や何れぞ、面上の刀痕は豈自ら昔日の悪闘苦衷を語るものに非ずや。眞に血湧き、骨鳴る一大活立志譚。

伊藤痴遊先生序・小野蘇史先生著
維新英雄と女
大判美本二五〇頁
正價七圓十錢
送費八錢

大事件の裏面には必ず女あり、と呼はるゝ如く、維新革命の驚天動地の大活劇に於ても亦、其陰には女子の力の加はれるを看過すべからず。本書維新幕末の諸英傑の情事を觀察して、隠れたる明治及維新史の秘密を發し、配するに、眞に園、木屋町先斗町より東は新柳二橋、吹界の情景を以て、眞に趣味津津たる英雄裏面史なり。

福本日南先生著 (東亞堂七週年記念出版)
(信濃毎日新聞批評) 收しる所精緻なる史論あり。奇警なる

龍溪隨筆

井上、大養、德富 六大家序・矢野龍溪先生著
尾崎 三宅 森 中判美裝二〇〇頁
送料六

賜天覽瑤

田中前宮内大臣題詞 龜谷天尊先生著
渡邊子爵手簡 袖珍美本五〇〇頁
送料六

動中靜觀

波邊黑岩佐々木茅原華山先生著
諸大家題序 中判洋裝三三〇頁
送料六

默想の天地

華山先生の文は世既に定評あり。西園寺陶庵侯は「恰も蘇老
泉の文を讀むが如し」と賞せられ。黒岩波香先生は「實に其趣
味の博きこと時人及ぶ者少し」と賛論せられたり。自書は先
生が半世の思想史にして又觀察史也。篇を分つても八自然を觀
察し、哲理を説く人物を評し、修養を論じて卓風風發、詩華
煥發近時出版界の一異彩たり。敢て大方の瀾覽を俟つ。
文學士沼波瓊音先生著 結城素明畫伯畫
袖珍美裝三〇〇頁
送料六

德富蘆花先生序・角田劍南道士先生著

評時文 德富蘆花先生序・角田劍南道士先生著
中判美本二五〇頁
送料六

歐米感想錄

文科大學教授文學博士中島力造先生著
願美裝二百六十頁
送料六

文明推移史論

世界新聞批評 日本と亞細亞文明の東漸
大判洋裝二五〇頁
送料八

支那及支那人

世界の大疑問たる支那を理解せむと欲する者、進んで其
山川の形勢、物質の集散を知るのみならず、進んで其
内情、外交の機變、漢人、滿人、其他支那に於ける各民族の關係
等、に就き縱横細密の觀察を下し、以て本書を成せるもの
支那の同文國に對し志を有する士の必ず一讀すべき參考書也。

最近學校評論

理學士藤田外次郎先生校閱・鹿田久村先生編
袖珍美本百七十頁
送料四

東語速成篇

清國張廷彦先生校閱・張毓謙兩先生合著
小形洋裝百三十五頁
送料四

東語速成篇

官話速成篇は張、宮澤兩先生が多年教授上の實踐に基き
支那語官話の教科書として編纂せられたる好著にして一々
著者の嚴父張廷彦先生の周密なる校閱を経られたる最新完
全の語學書なり。
▲東語速成篇は官話速成篇の總譯にして一は以て清國人に
して本邦語を學ぶ者の參考書たらしめんとを期したるも
の學者兩書を對修せば得る所更らに多からむ。

黒法師先生著

世界の美人探検

大説書 大判美本四八〇頁 送費八圓四十銭

野口米次郎先生著

邦日本少女の米國日記

大判美本二八〇頁 送費八圓七十五銭

第六高等学校獨逸語講師 秋元蘆風先生譯

シルレル詩集

袖珍美本一九〇頁 送費四圓十銭

町田柳塘僊史著

訂漢詩講話

袖珍美本二五〇頁 送費六圓十銭

文學士大町桂月先生著

作文法講話

中判美本百十頁 送費四圓十銭

高濱虛子先生編

新寫生文

中判美本二三〇頁 送費八圓十銭

(文章世界批評)著者は何れも寫生世界の鐵中錚々たる人々なれば寫生文を學ばんとする者に取ては無上の模範書たるべし、記者は就中『觀山詣』を愛讀するものにて、殊に其の中の『鳥の聲』の一編の如きは稍々細工を弄したる痕の見えろに拘らず、尙冒知らぬ感想を惹起されざる能はざるを覺ゆ。

文學博士幸田露伴先生著

小説はるさめ集

大判美本百七十頁 送費八圓七十五銭

(讀賣新聞批評)露伴氏の傑作中の傑作と稱せられたる一口劍、風流佛、未練の三篇を合したるもの(國民新聞批評)殊に文章の精緻にして崇重なる而も洒脱にして脂粉の氣を脱せし世に及び易からず著者の出世作として明治文壇の産物として讀んで多大の興味あるべし(日本人批評)風流佛の超理想化して描寫殆んど神に迫る。

註 二日物がたり

中判美本百十頁 送費四圓十銭

(此一日の一節)西行がすかに眼を轉じて、聲する方の間を覗へば、ねば玉の黒き中を、朽木のやうなる光りもてる霧とも雲とも分がざるもの仄白く立ちまよへる上に、其様異なる人の丈いと高く瘦せ衰へて凄じく、(彼一日の一節)月はやがて没るべく西に廻りて、御堂に射し入る其光り水かとはかり冷かに、端然として合掌せる二人の姿を浮ぶが如くに、御堂の闇の中に照し出ぬ。

山口小太郎先生序・秋元蘆風先生著

シルレルの歌評釋 大判美装全一冊 送費七圓十銭

文學士武鳥羽衣先生序・志賀華仙先生著

和歌作法

中判美本一三〇頁 送費四圓十銭

(讀賣新聞批評)主として短歌作法の骨子を記述せるものにして内容を分ちて四となし第一章は和歌沿革の概要を説き第二章以下作法、歌調、詠歌上の諸注意に及べり叙述簡易初學者の好参考書也(東京日々新聞批評)詠歌に關する諸種の注意を掲載し、類語枕詞及歌の書式を列記せり歌學の門に入らんとする者の好参考書ならん。

佐藤仁之助先生著

新百人一首通解

寸珍美本百二十頁 送費二圓十銭

小倉百人一首を、頭字に據りてあいうえお順に排列し、ごくわかり易く解釋した。百人一首を覺えるためにも、亦和歌を習ふ人の參考にも至つて便利な可愛い本。一年末歳首の御進物用などには、外に類なき適當品です。

東京高等師範學校講師戸川秋骨先生著

英文學講話

中判美本一五〇頁 送費六圓十銭

本書は近世の本邦文學に深大の影響を與へたる英文學の如何なる者たるかを詳説して英文學と大陸文學との關係に及び更に沙翁ミルトン等よりカーライルラスキン等の諸家を論じ、其作品を評議し且ローマンチズム、ナチュラリズム等の因て來る所以に亘りて光輝燭文紙上飄々の聲を發す近代の新文學を知らんと欲する者の逸すべからざる名著也。

◎誰れが讀みても面白き、日本文學の傑作全集。

文學博士 幸田露伴先生 校訂解題

日本文藝叢書

▲立五寸。横三寸。振がな付。每册三百頁内外。振がな付。一册貳拾錢均一。特製金彩本。拾錢均一。送費一册四錢。五册迄八錢。

本日本文藝叢書既刊目錄

- (1) 馬曲 亭著 椿説弓張月(上)
- (2) 文湖 山南編 通俗三國志(一)
- (3) 馬曲 亭著 椿説弓張月(中)
- (4) 一十返舎九著 道東 膝栗毛(前)
- (5) 著者不詳 訂新 太平記(一)
- (6) 文湖 山南編 通俗三國志(二)
- (7) 近松門作 左衛門 近松淨瑠璃佳作集(一)
- (8) 馬曲 亭著 椿説弓張月(下完)
- (9) 著者不詳 訂新 太平記(二)
- (10) 一十返舎九著 道東 膝栗毛(後完)
- (11) 文湖 山南編 通俗三國志(三)
- (12) 西井 鶴原 西鶴佳作集(一)
- (13) 著者不詳 訂新 太平記(三)
- (14) 馬曲 亭著 驚奇卷 俠客傳(上)
- (15) 其江 嶺著 其嶺佳作集(合)
- (16) 文湖 山南編 通俗三國志(四)
- (17) 著者不詳 訂新 太平記(四)
- (18) 著者不詳 訂新 一休諸國物語(全)
- (19) 馬曲 亭著 驚奇卷 俠客傳(中)
- (20) 三式 馬著 浮世風呂(全)
- (21) 近松門作 左衛門 近松淨瑠璃佳作集(二)
- (22) 著者不詳 訂新 太平記(前)
- (23) 著者不詳 訂新 西鶴佳作集(二)
- (24) 西井 鶴原 西鶴佳作集(一)
- (25) 武道傳來記。織留。懷現。
- (26) 武道傳來記。織留。懷現。
- (27) 武道傳來記。織留。懷現。
- (28) 武道傳來記。織留。懷現。
- (29) 武道傳來記。織留。懷現。
- (30) 武道傳來記。織留。懷現。
- (31) 武道傳來記。織留。懷現。
- (32) 武道傳來記。織留。懷現。
- (33) 武道傳來記。織留。懷現。
- (34) 武道傳來記。織留。懷現。
- (35) 武道傳來記。織留。懷現。

本日本文藝叢書既刊目錄

- (21) 文湖 山南編 通俗三國志(五)
- (22) 馬曲 亭著 驚奇卷 俠客傳(下完)
- (23) 三式 馬著 浮世床(全)
- (24) 著者不詳 訂新 太平記(五完)
- (25) 文湖 山南編 通俗三國志(六)
- (26) 編者不詳 訂新 大岡政談(全)
- (27) 文湖 山南編 通俗三國志(七)
- (28) 編者不詳 訂新 續大岡政談(全)
- (29) 柳種 彦著 邯鄲諸國物語(前)
- (30) 柳種 彦著 邯鄲諸國物語(後完)
- (31) 柳種 彦著 邯鄲諸國物語(後完)
- (32) 文湖 山南編 通俗三國志(八)
- (33) 馬曲 亭著 馬琴佳作集(一)
- (34) 春爲 永著 義傳 いろは文庫(前)
- (35) 春爲 永著 義傳 いろは文庫(後完)
- (36) 近松門作 左衛門 近松淨瑠璃佳作集(二)
- (37) 著者不詳 訂新 太平記(前)
- (38) 著者不詳 訂新 西鶴佳作集(二)
- (39) 西井 鶴原 西鶴佳作集(二)
- (40) 西井 鶴原 西鶴佳作集(二)
- (41) 兼好法師 武道傳來記。織留。懷現。
- (42) 兼好法師 武道傳來記。織留。懷現。
- (43) 兼好法師 武道傳來記。織留。懷現。
- (44) 兼好法師 武道傳來記。織留。懷現。
- (45) 兼好法師 武道傳來記。織留。懷現。
- (46) 兼好法師 武道傳來記。織留。懷現。
- (47) 兼好法師 武道傳來記。織留。懷現。
- (48) 兼好法師 武道傳來記。織留。懷現。
- (49) 兼好法師 武道傳來記。織留。懷現。
- (50) 兼好法師 武道傳來記。織留。懷現。
- (1) 馬曲 亭著 椿説弓張月(上)
- (2) 文湖 山南編 通俗三國志(一)
- (3) 馬曲 亭著 椿説弓張月(中)
- (4) 一十返舎九著 道東 膝栗毛(前)
- (5) 著者不詳 訂新 太平記(一)
- (6) 文湖 山南編 通俗三國志(二)
- (7) 近松門作 左衛門 近松淨瑠璃佳作集(一)
- (8) 馬曲 亭著 椿説弓張月(下完)
- (9) 著者不詳 訂新 太平記(二)
- (10) 一十返舎九著 道東 膝栗毛(後完)
- (11) 文湖 山南編 通俗三國志(三)
- (12) 西井 鶴原 西鶴佳作集(一)
- (13) 著者不詳 訂新 太平記(三)
- (14) 馬曲 亭著 驚奇卷 俠客傳(上)
- (15) 其江 嶺著 其嶺佳作集(合)
- (16) 文湖 山南編 通俗三國志(四)
- (17) 著者不詳 訂新 太平記(四)
- (18) 著者不詳 訂新 一休諸國物語(全)
- (19) 馬曲 亭著 驚奇卷 俠客傳(中)
- (20) 三式 馬著 浮世風呂(全)
- (21) 近松門作 左衛門 近松淨瑠璃佳作集(二)
- (22) 著者不詳 訂新 太平記(前)
- (23) 著者不詳 訂新 西鶴佳作集(二)
- (24) 西井 鶴原 西鶴佳作集(一)
- (25) 武道傳來記。織留。懷現。
- (26) 武道傳來記。織留。懷現。
- (27) 武道傳來記。織留。懷現。
- (28) 武道傳來記。織留。懷現。
- (29) 武道傳來記。織留。懷現。
- (30) 武道傳來記。織留。懷現。
- (31) 武道傳來記。織留。懷現。
- (32) 武道傳來記。織留。懷現。
- (33) 武道傳來記。織留。懷現。
- (34) 武道傳來記。織留。懷現。
- (35) 武道傳來記。織留。懷現。

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著
國語漢文科講師 佐藤仁之助先生著
速成 漢學捷徑
箱入美本四十五〇頁
正價 壹圓貳拾錢
送費 十錢

(やまと新聞批評)本書編を分つ事十三、漢文と漢學とに關する一切の要綱を説いて親切を極む殊に龍頭に故事成語を解を収め更に卷末に索引を附せるが如き以て著者の用意の如何に深きかを知るに足るべく真に捷徑の名に負かず。

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著
國語漢文科講師 佐藤仁之助先生著
國語漢文要語詳解
全三冊各三百數十頁
正價各本 四圓
特製各本 壹圓
送費各本 八錢

(東京日々新聞批評)國語漢文中に用ひらるる熟語故事數百句を抽出し之に詳細なる解釋を施し且語原を註記せるものにして國語漢文を學ばんとする者は云ふ迄も無く其他單に普通文を讀する者に取りても裨益する所尠少にあらざるべし(日本新聞批評)國語漢文の要語を字音に従つてイロハ順に排列し其意義典故を示せるものなり受驗用として適當ならむ。

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著
國語漢文科講師 佐藤仁之助先生著
受驗 日本文法解義
中判美本百九十頁
正價 四圓十五錢
送費 六錢

本書は在來文法書の一讀直ちに要領を會得して實際の活用を資するもの鮮きを概し、日常教授上の經驗に基き、從來に類例なき新式を以て編纂せられたる其書にして、最も少なき時間と努力とを以て、よく日本文法の蘊奥に通じ、最も少なき附するに各種專門學校入學試驗問題并に教員檢定試驗問題を以てして、一々其解答の方法を示されたれば受驗準備の参考として、將た又た中學上級の補習用等として頗る便利なる參考也。

幸田露伴先生序 文學士沼波瓊音先生編
笹川徳風先生序 文學士沼波瓊音先生編
名家 俳句大成
橫濱美本四十五〇頁
正價 一圓二十錢
送費 八錢

俳諧創始以來近世に及びて、守武、宗鑑、貞徳、宗因、芭蕉、鬼貫、太蕪、蕪村、一茶、于規、紅葉等總計壹百五家に就き、其機軸とすべし佳吟名句を選みて、之を四季に分ち、更に各者の出處、開歷、著書事業等を擧げて諸家の風格特調を明にせるもの、宛然古今の俳仙を一堂に會し、以て一大雅苑を張るるの思あらしむ。實に本書は、最も大規模なる「俳句選」にして、且つ「俳家人名辭書」を兼ねたる俳人必携の新寶典也。

文學士佐々醒雪先生序・文學士沼波瓊音先生編
俳句講話
中判美本二四〇頁
正價 四圓十錢
送費 六錢

(中央公論批評)評初學者の手引草にと一わたり俳句の作方を解き古今人の四季の名句を解釋し終に參考とすべき俳句集に俳論書を擧げて其の梗概をも示したるもの説明の體煩閑宜きを待能く初心者をして俳の精神を默了せしめ得る者也。

文學士久保天隨先生序・文學士沼波瓊音先生著
俳句研究
中判美本約二百頁
正價 四圓十錢
送費 六錢

(萬朝報批評)むづかしき理窟を列べずして、著者が己れの俳歴を其儘に、初學者の參考としたるは面白し、俳句の評釋も字句に拘泥せずして其趣を盡く見るやうに説きたるは嬉し(大阪毎日新聞批評)冒頭先づ瓊音子自家の俳句研究の過程を語り次に古今名家の俳句を評釋し兼て俳句と他文藝との關係を論ぜり俳句入門の書として初學者に實益する所多し。

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著
國語漢文科講師 佐藤仁之助先生著
漢字異同辨及用法
寸珍美本貳參〇頁
正價 二圓十錢
送費 二錢

本書は同訓或は同音にして、而かも其の意義を異にせる漢字の異同を辨じ、且つ一々用例を示して、懇切に使用法を説き以て机上の便覽に供したるものなれば、世の操觚の業に従へる諸君は勿論、日常作文の參考書として萬人必携の寶典也。

佐藤仁之助先生校補・東亞堂編輯局編
國語異同辨附用法
寸珍美本百八十頁
正價 十圓五錢
送費 二錢

本書は、國語の中に於ける同字同音の語句、或は相似の文字にして、意義を異にするもの數千言を對照し、一々懇切に其異同を辨じたるものにして、斯學に於て堪能の聞え高き佐藤仁之助先生の嚴密なる校補を経、且つ同先生の最新に成れる便利なる假字用法及動詞語尾區別表を附したれば國語研究の參考として有益無比の頁書也。

佐藤仁之助先生立案
假字用法及動詞語尾區別表
ポケット入形折本
正價 六錢
送費 二錢

吾人が文章を作るに際し、一見非常に容易なるが如くにして、而かも實は却つて多大の困難を感ずるものは、夫れ所謂「かな遣ひ」に非ずや。本書は國語かな遣ひ、字音假字遣ひの全部に亘り、一々記憶し易き便法を示し、且つ誤り易き動詞語尾の變化及區別を詳述して、文章家并に國語研究者の絶大便利を策したる佐藤仁之助先生の最新一覽表也。

文學士 沼波瓊音先生著
俳句階梯
中判美本壹二〇頁
正價 三圓十錢
送費 四錢

(中央公論批評)俳句なるもの、起因から説き初めてそれに餘情の算はれる事や季節の必要な事や此の理由を明らかにした上その季節に關する法則、切字の心得題材には平等觀を持つべき事字句の簡潔を要する事、時には繁冗なも厭はるるの如何等一々例を擧げて平易に周知に手引したるは修辭法文學士沼波瓊音先生校訂三宅嘯山師遺著

俳古選新選
橫濱美本二百卅頁
正價 四圓十錢
送費 六錢

(新小説批評)古選は曾て俳諧珍本集中に編されて大野酒竹氏の校訂あり當時珍本中の珍本として持て囃されたるが後ちその姿を見る能はざりしに今又校訂者の多大なる苦心の結果こゝに此の書に接するを得たるは俳諧研究者のみならず一般讀者の渴を醫する事甚大なるべくと思はる新選は蕪村太蕪藝太等の句散見するを以て興味なかに深し鬼の少かるべし吾人は本書を推薦するに吝ならざるものなり、裝釘の俳味を帯べる亦嬉し。

鳴雪、竹冷、瓊音、服部耕石君著
人生俳句集
中判美本全一冊
正價
送費

人を離れて、事なし。課題と云はず、贈答と云はず。俳人雅客が最も多く句作を敷せらるるの類題は、夫れ人事句に非ずして何ぞや。本書は服部耕石先生が、博く古今の俳諧に關する珍本秘籍を涉獵して、祝賀、用祭、贈答、寒暄、行樂、情景、感想、神祕、釋教、戀、無常等の諸門に亘り、凡そ人事に關する名吟佳句は洩らさず蒐集分類して、春夏、秋冬、雜の順序に排列せし俳人必携の一大便覽也。

紐育ヘラルド通信員イ、ツエー、ハリソン氏原著
法學士神崎博光費田江東兩君共譯

日露の再戰

本書は將來日露兩國の再び東亞の天地に砲火を交ゆべき運命を有する所以を、歴史、地理、外交、經濟、人種問題等の諸方面より、縱横脱白に、警拔なる論評を試み、以て世界諸國の權力論に及べる快著にして、原書發售以來廣く識者同間に喧傳せられ早くも數十萬部を賣盡せる事實に徴するも如何に其稀世の名著たるかを知るに足らむ。苟くも志ある同胞は他山の石として速に本書を一讀せざるべからず。

兒玉陸軍大將遺墨 陸軍歩兵大尉
山口陸軍少將題字 本間徳次郎君著

血戰

本書は、同胞の血と、肉と、砲火とを以て彩られし日露戰爭の猛烈凄慘なる、旋乾轉坤の大活劇を、本間陸軍大尉が、燃屏の戰術眼を以て、精細に活寫せられたる、空前の劇戰記にして、一讀魂飛び、神慄く、日本男子必讀の大快著也。

日野陸軍少佐校閱・平山周先生著

最新飛行機圖說

東京日日新聞批評 本書は、飛行機沿革機體の構造及材料機軸の構成其の効率推進機に關する諸般の事項を説明することを詳細に飛行機に於て最も重要な發動機を説明するに注ぎたるもの如く多量學術的智識を加味して而も通俗に之れを説明せる所甚だ要を得たり卷末にはライト、グロウマン、カーチス、ブレイロー、ネッポ、飛行機の通泰其他各飛行機の明細なる圖解を掲げあり、本邦飛行界の通泰斗日野少佐の序々に、之れを歐洲の最新著に比するも致して遜色なきを信す云々」とある、又宜なるべし。

大思想家の人生觀

カント出で、哲學の明星と仰がれ、後、ヘッケル、セエムス等皆一家の哲理を説くと雖も、徹底したる者とは言ひ難かりしに、オイクン氏出で、此等の説を大成して吾人の眼を驚かし、獨のオイクン佛のメルゲソンは近時思想界の二大權威也。今安倍文士雄麗莊重の筆を以て其名著大思想家の人生觀を譯出せらる、志ある者の必讀すべき一大名著也。

世界のアラビヤ縦斷記

近時中央亞細亞に於ける研究、全世界の一大懸案となるるの今日、南方亞細亞の神秘境たるアラビヤの真相を知るに決して徒爾なりとせざる所、本書の著者山岡氏身を回教徒にやつして歴々萬死の境を冒し、自ら那人未踏異教徒不可侵のアラビヤを踏破して、壯絶快絶なる一大探検を成就す、縁際樹下本書を繕はば、萬斛の涼味紙上に生動するを覺え、眞に筆を描く能はざるものあらん。

大奈翁日記

●怪傑ナポレオンが偽らざる自己告白！
身を砲兵の一士官に起し、一躍終身執政官、再躍帝位を得て旭日昇天の機ありし蓋世の英雄ナポレオン第一世が、其科の痛手を負ひし敗北を招き、カオレオン第一世の決戦に暴行監視の下、洗々たる瘴氣と侮辱を蒙らざるなき英兵の最脚眼目する迄の日記現はる、是れ翁が波瀾萬狀の生涯と紛闘難せる當時の西歐天地の縮圖也、敢えて江湖に勸む。

文學博士富士川游先生序・澤田順次郎先生著
ドクトルル富士川游先生序・澤田順次郎先生著

男女の關係

本書は千古の一大疑問たる、男女兩性の差異を研究し、冷靜なる科學の立場より、兩性が赤裸の真相を暴露して、冷靜なる科學の必要を唱道し、且つ男女各任務の分業、生殖の意義、愛研究の必要等を説き、男女兩性を一痛棒を加ふ、男女戀色の害毒等を説き、現時の社會風教に一大痛棒を加ふ、男女執れたるを問はず、必ず一讀の要ある快著也。

神通力の研究

世に不可思議の力あり能く聲無きを聴き、見ざるを察し、福を未然に防ぎ、福運を將來に開拓す。稱して神通力と呼ぶ。而かも此の不可思議の力たるや、實に我等人類に通用せる一大伏能なりと云ふに至つては、誰れか此支妙の福有せし得ざらんや。本書這般心靈界の非常現象を闡明して餘蘊なし。何人に對するも極めて興味深き緊要文字！

大日本催眠學會長 小野福平先生著

催眠術治療精義

本書は、大日本催眠學會會長として、本邦催眠術研究者の先覺たる小野福平先生が富饒なる學識と、多年の實踐とを基礎とし、博く東西の學說を參酌して筆を催眠術の原理とを基礎とし、心理學、生理學、醫學等の根柢より、催眠術を以て治療し得べき諸種の疾病の病理、症候、經過、療法等を説明せられたる催眠學界空前の大著にして催眠術研究者に勿論、醫家、學者等の荷も看過すべからざる良書也。

死に、行く身

シエンキイウキツ原著・本間久先生譯
附録 ゴルキキ原著 轉び行く石
原著者シエンキイウキツ及ゴルキイは共に、現代全歐文壇を風靡せる二大明星也。而して本書は兩氏が、現代全歐文壇中最も卓越せるもの各一編を擇び、譯文又、直譯、逐字譯等の通弊に捕促せられず頗る明快暢達なると稱せしむる所なし。

森林學講義

近時木材用途の激増と其面積の農業に蠶食せられたるは、森林をして荒廢の極に達せしめ、間接には氣候の調和を破り洪水旱魃の害を發し、直接には用材薪炭の不足を來したるは、社會生活上の困難を醸成するに至れり、於是森林學の必要益重きを加ふ。著者大に鑑むる所あり、今多年の蘊蓄を傾盡して本書を著す。編を分つ七、章を劃する二十五、叙述明快にして懇切、萬人必讀の好文字。

法華物語

傳來以降二千載、佛敎が我が國文化に及ぼしたる影響の甚大なるや論を俟たず。深遠なる哲學と、神祕なる宗教の寓意とを以て作成せられたる八卷二十八品の法華經は、其典の主たるものにして、これに通達する者やがて佛敎を其の難解なる經典を叙述するに、境野先生の雄渾壯麗の筆を以てして、法華の眞髓を紙上に壓搾せり。巻尾の索引亦儘に佛語辭書の用をなし、便益無比。

第一等軍醫 音尾博士著

家庭醫學

大判美本 五百頁
正價 貳圓七拾錢
送費 十一

千里の長堤も一蟻穴より壞れ、貴重なる人命も些々たる不注意によりて失はる。凡そ衛生思想の幼稚、醫學觀念の缺乏せる我國民の如きは、此かるべし。これ本書ある所以なり。近時社會の競争激甚なるに、連れ人の健康を要する者、愈々急なり。これ本書ある副因なり。本書を愛讀する者にして、始めて家庭の和樂と、天授の幸福となさざる事を得んか。

中野時一郎先生著

旅行の衛生

中判美本 全一冊
正價 七十五錢
送費 八

旅行の季節と衛生、汽車旅行の衛生、海上旅行の衛生、徒歩旅行の衛生、旅中飲食物の衛生、旅館と衛生、炎天旅行の衛生、寒國の旅行衛生、森林中の旅行衛生、乾燥地及卑濕地旅行衛生、携帯の藥劑及器具、疾病及救急療法、人工呼吸法、外傷、中毒症、他應急處置等の章の下に、數百項を平易明快に叙述したる旅行家の一福音書也。

足立栗園先生著

心身静坐内觀秘法

大判美本 全一冊
正價 七十八錢
送費 八

本書は足立栗園先生が多年研鑽の結果識得せられたる玄妙の奧機を闡開して、古來仙家に於て秘用せられたる、禪に於て練成せられたる、静坐内觀の一大秘法を祖述し、禪家に於て實地の修行を、懇切に解説を加へられたる、一大秘法にして、其實行の手軽なる、之を夜間就寝しつゝ行ふも、亦妨げず、面からも其効驗の特長偉大にして、從來修練法の類の遙かに企及すべからざる各種の特長偉大に富めるが、一たび實験せしむると、其等しく驚嘆を禁じざる所とす、剛健體の如き内觀と、此等活火の如き大氣とを養成せむと欲するの士は、來て此理想的精神療法を試みられよ。

角田浩々歌客先生著

漫遊人國記

大判美裝約七百頁
正價

著者は操觚界に噴々の文名を有し且足跡全國に遍き、滑稽歌客也。其北海、森林と漁業の關係を論じ、山陰、山陽、丹波の題下に酒々、數語を發したる如き、或は東北、北陸の人情風俗を説破し隱蔽せられたる史實を闡明したる、又大阪人の研究を赤くに試みたる、乃至は小豆島の將來の發展を下し、三國一の靈山芙蓉峯の八面觀をなしたるが如き、其觀察の奇抜にして、變化の極まり無き讀者をして殆んど應接に遑なからしむ、趣味と實益とを併せ得たる一大常識地理書也。

東亞堂編輯所編

日本山水史蹟

袖珍箱入美製本
正價

案内記なくして旅行するは提灯なくして暗を行くが如く、脚下の名所を逸し、沿道の發蹟を看過して歸宅の後、其案内記の滑稽は到る處に演ぜらる、尤も各地の名所、其案内記を有せざるに非ざるも、しかも全國に亘りて、挿畫一千に垂んとし、毎頁記事の各地名勝の眞景を掲げて、一々其現勢と案内とを述べ更に古來の史籍其より土地に関する合戦、史實、傳説等を掲げる美文、雅文、物語等を抜きて對照せるなど、本書の如き類例を見ざる所、近時出版界の一大壯觀也。

文學士 若月保治先生編

英語練習ノート

ボケタト形美本
正價 四十八錢
送費 六

語學は主として記憶の學科なれば、其材料の撰擇及排列に當て得むか、獨學よく之れが深淵を窮し、應用の自在を得ること決して至難にはあらざらず、本書に飽迄此の目的を徹せむが爲め編纂せられたるもの、請ふ一本を座右に備へて眞價の存する所を諒せられよ。

338
153

終